

2010年度大学院案内

<https://hdl.handle.net/2324/18903>

出版情報：九州大学大学院比較社会文化学府大学院案内. 2010年度, 2010-07. Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン：

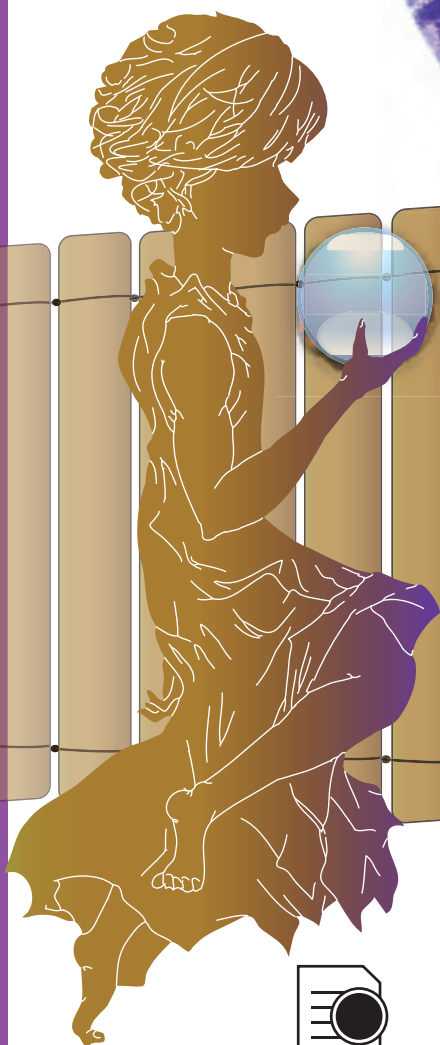
権利関係：





九州大学

2010 年度大学院案内



越境する文化
共振する世界
変動する環境

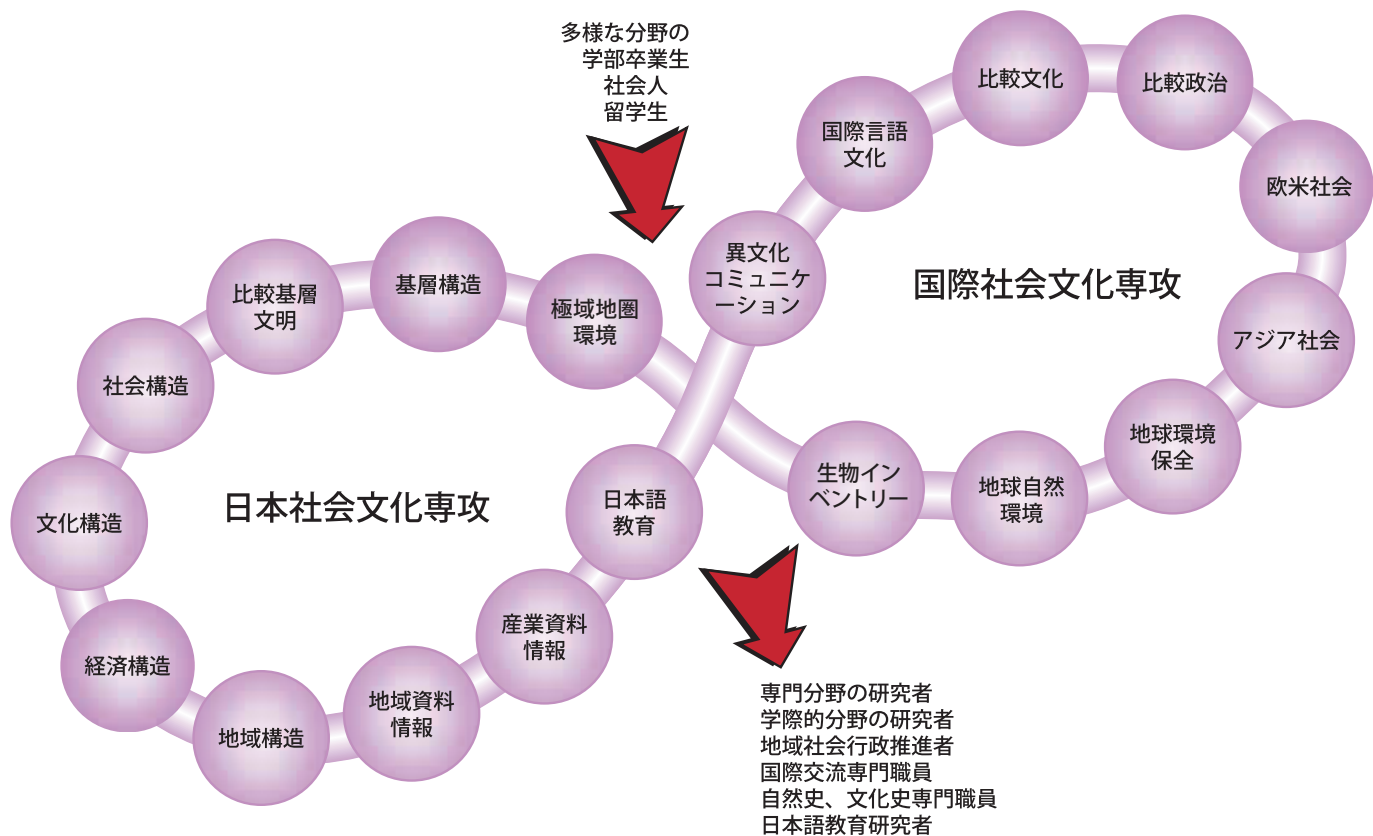


大学院比較社会文化学府

Graduate School of Social and Cultural Studies

Kyushu University





目次	比較社会文化学府の特色……………	1
	各専攻の理念……………	2
	研究教育体制の特色……………	3
	研究・教育プログラムについて……………	6
	歴史を学ぼうとする人々へ……………	6
	カルチュラル・スタディーズを学ぶ人に……………	8
	社会学を学びたい人のために……………	9
	政治の世界を探検しよう！ー政治学分野の紹介……………	11
	国際関係論・国際社会論のすすめ……………	12
	言語教育学関連の研究のために……………	13
	日本語教育実践者養成プログラム……………	14
	世界の「韓国研究」へ……………	16
	文化人類学を学びたい、あなたに！……………	17
	人文地理学を究める……………	18
	たとえば「漫画」を研究したい人に……………	19
	ロマン主義研究コース……………	20
	中国研究を目指すあなたへ！……………	21
	経済を分析してみませんか？……………	22
	比文理系の研究・教育とその展望……………	24
	考古学・人類学メニュー……………	25
	地球創生期から現在まで……………	26
	気候変動予測のための古気候解析……………	27
	物理・化学の目で地球環境を調べる……………	28
	物質科学研究グループ……………	29
	生物多様性分野……………	30
	連携講座『生物インベントリー』……………	31
	教員紹介……………	32
	在籍学生数……………	50

比較社会文化学府の特色

私たちの学府は、つぎのような理念を研究・教育の柱としています。そして、その理念を実現してゆくためには、既成観念にとらわれない教員の側の努力が不可欠であることは言うまでもありませんが、学生諸氏にも、たんなる「受信者」ではなく、みずから「発信者」となって積極的に学習し研究することが期待されているのです。

1

異なる社会文化の 共生を目指した研究教育

現代世界は、国家間の関係という意味での「国際化」をこえた、グローバル化の時代にあります。それは人やモノ、資本、情報などの移動と交流の飛躍的な増加や、地球環境問題の深刻化など、様々な面を合わせもつプロセスとして進行しています。それはまた、従来なかったような軋轢や文化の画一化を生み出しています。

しかし同時に、グローバル化は、異なる文化伝統をもつ諸社会が互いに理解を深め、共生してゆく契機ともなりうるものです。そのような新たな状況を前にして、異質な社会に暮らし、異なる文化を生きる人々の間に、違うからこそお互いを豊かにしあうような関係を、どのようにして育ててゆくことができるのか。それを模索してゆくことが、私たちの学府の課題です。

3

日本と世界を結ぶ 行動人の養成

たしか知識に裏打ちされた批判意識をもち、それと同時に、自分と異質なものに対しても、しなやかな感受性をもつ人こそ、真の国際人と言える私たちは考えています。しかも、受信し考えるだけでなく、発信し行動する実践的な国際人がもてめられているのが現代という時代です。そのような人々を育ててゆくことを、私たちの学府はめざしています。

そのために、日本の社会文化についての研究でも、他の社会との比較という視点を失わず、外国の社会文化についての研究でも、日本との比較という視点を重視してゆきます。日本知らずの外国通でなく、日本について深く語ることができると同時に、異文化について共感的な理解ができる人間として自らを育ててゆくこと。私たちは、それを学生諸氏とともにめざしてゆきたいと考えています。

2

学際的なアプローチ

私たちの学府の教員の専攻分野は、従来の区分で言えば、人文科学・社会科学・自然科学の多岐の分野にわたっています。そのような構成をとっている理由は、私たちの目的が学際的な研究教育にあるためにほかなりません。現代社会が直面している問題は、どれひとつをとっても、旧来の専門分野の区別をこえた複雑さと広がりをもっています。

そこで私たちの学府は、社会・文化・自然の様々な視覚から問題にせまる総合的なアプローチを研究教育の柱にすえています。そのような学際的な研究教育を実り多いものにするために、専攻を異にする複数の教員が、連携し協力することに努めていることは言うまでもありません。そして、そのようにして提供された「土壌」に、自ら問題意識という「種」を播いて、それを育てて「創造的な研究という花」を咲かせることこそが、学生諸氏に期待されているのです。

4

社会に開かれた学問

大学の新卒者は、学府の入学者として私たちが思い描いている人々の一部にすぎません。既に社会に出て活躍している方々や留学生は、新卒者と同様に私たちの学府の主役です。

さらにまた、研究者の養成は大学院の重要な使命ですが、専門的研究者は、大学院を修了した人々について私たちが思い描いている姿の一部にすぎません。さまざまな職業分野での実践をとおして、大学院での研究の成果を活かす専門家。既に社会人としての体験を経たのちに大学院で研究し、その体験を元の職場にもどって活かして活躍する人々。日本での研究の成果を、自国にもどって、あるいは他の国での活動に活かしていく外国からの留学生。そのような人々も、私たちが想定している大切な学生なのです。

私たちの学府を、国籍や性や言語や社会体験などの点で異なる人々が出会い、共に生き、互いに高めあう場としてゆくこと、それが私たちの願いなのです。

各専攻の理念

〔日本社会文化専攻〕

日本は現代さまざまな問題に直面しています。それらを日本という国家の成立・発展・功罪を問いつつ、批判的に研究することは、私たちの未来を構想するために不可欠なものです。そこではまた、国家という枠組みを相対化する視座も必要になります。国家の枠組みにとらわれない生活者の歴史や、一定の自律性をもつ地域の変動過程に対する目配りが欠落すると、日本の歴史的・現代的問題の全体像をかえって見えにくくしてしまうからです。さらに現代的問題の多くが自然環境との共生に関わるものであることを考えれば、自ずと人間社会それ自体を相対化する視座も求められるでしょう。

グローバリゼーションの時代にあって、日本人が日本について深く理解することは、いっそうその重要性を増しています。しかしそれは、日本のみを対象とする研究によって得られるものではありません。海外との相互影響が日常的なものとなっている現代においては言うまでもなく、文字資料のない昔から、日本列島の文化と社会は、外との交流なしでは形成されえなかったものです。つまり日本研究においても、「世界の中の日本」という観点が不可欠なものなのです。

これらの点に注意しながら、私たちは、日常の出来事、諸制度のしくみや変遷、言語文化の変容、考古資料など、あらゆるものに「日本」を解く鍵を求めてゆく必要があります。しかし、そもそも日本人が日本について研究するというのは、どういふことなのでしょう。逆にいえば、日本を研究するときに自分が日本人である（あるいは外国人である）ことをどう意味づけるべきなのでしょう。こうした「客観的な知」のあり方に関わる認識論的問題を見ずぐすことはできません。

本学府の「日本社会文化専攻」では、以上のような問題意識を共有しつつ、既存の学問分野それぞれの長所を活かしながらも、それを越えるような学際的研究を推し進めることを目指しています。

〔国際社会文化専攻〕

現在の世界には、孤立し自足した社会は存在しません。経済・政治・文化・環境などあらゆる領域において、世界は相互に依存し影響しあうようになっています。さまざまな問題は、もはや国境の内部には留まっていませんし、その解決のためにも、国家の枠組みを越えた協力が必要になっています。世界は、ひとつのシステムを形成しつつあるのです。

しかし他方で、その同じ状況が、社会や文化の間の差異をいっそう際立たせ、ときには相互誤解を生み、暴力的衝突すら引き起こしています。つまり世界は、矛盾や支配や不平等を含んだ未完のシステムなのです。

そのような世界に生きる私たちが、よりよい未来を構想するためには、どのような研究がなされなければならないのでしょうか。第一に、「地球」という観点を重視してゆくことでしょうか。地球は、私たち人間だけでなく、すべての生物の「ふるさと」なのです。第二に、社会や文化（それは国家という単位に対応するとは限りません）の間の差異が、不平等や相克性へと転化してしまうメカニズムを明らかにしてゆく研究でしょう。そうした問題意識なしで、諸社会や諸文化の共存を謳うことには意味がありません。現実には存在する多様性は、人類の貴重な遺産であると同時に、その可能性の現れでもあるのです。

差異がつねに誤解を生むのだとしたら、これほど不幸なことはありません。しかししばしば、異なる社会に暮らし、異なる文化を生き、異なる言語を話す人々の間には、誤解が生じ、差異を相克性へと変えてしまいます。そのような事態を避け、そこに実り豊かな対話を成立させるためには、コミュニケーションというものの自体についての透徹した研究が必要であることは言うまでもありません。

本学府の「国際社会文化専攻」では、以上のような問題意識を共有しつつ、既存の学問分野それぞれの長所を活かしながらも、それを越えるような学際的研究を推し進めることを目指しています。

研究教育体制の特色

1

専攻について

本学府は、「日本社会文化専攻」と「国際社会文化専攻」の二つの専攻から構成されています。学生の一人一人は、どちらかひとつの専攻を選んで出願し、入学後はその専攻に所属する学生となります。しかし、自分の所属していない専攻の演習を履修することは可能ですし、一定の範囲で他専攻（あるいは他学府）の単位を履修することが義務づけられてもいます。また念のために申し添えれば、本学府の教員は、教員の組織としての19の講座に所属していますが、学生は特定の講座に所属する学生となるわけではありません。

2

指導教員団について

学生の一人一人に対して、入学後におこなわれるオリエンテーションを経た段階で、本人の希望を最大限に生かすかたちで、本学府専任の教授・准教授・講師のなかから、3人の指導教員からなる「指導教員団」が選ばれることになります。

本学府が「指導教員団」による研究指導体制をとっている理由は、学生に対して幅広く的確な指導をしてゆくためです。学生一人一人の学問的関心・研究計画は、従来の学問分野のいずれかひとつに必ずしも納まらないことが予想されますし、学際的なアプローチを重視している本学府では、むしろそのような学生を歓迎します。しかし、修士課程2年また博士後期課程の3年という時間は限られておりますし、修士課程を修了するためには、全員に修士論文の執筆が義務づけられています。そこで従来の学問分野をこえて広く学びながらも、それを各自の問題意識に合わせて生産的に関連づける研究・履修計画が必要になります。そのような研究・履修計画の策定と実行をサポートするのが「指導教員団」です。もちろん研究をすすめてゆく上で、他の教員からも指導を受けることは可能であり、それは望ましいことでもあります。学生各自の研究計画にそって、自ずと一定数の教員から日常的に指導を受けることになるでしょう。その核をなすものが「指導教員団」とであると理解してください。

各専攻の講座編成と教員名簿

専攻	講座	教授	准教授	講師	助教
日本社会文化	社会構造	吉岡 斉 吉田 昌彦	杉山あかし 直野 章子	マシュー オーガスティン	
	文化構造	松本 常彦 清水 靖久	西野 常夫 波湯 剛 施 光恒 アンドリュース・ホール		
	地域構造	高野 信治 三隅 一百	山下 潤 阿部 康久		
	基層構造	田中 良之 中橋 孝博 岩永 省三 (総合研究博物館)	溝口 孝司 佐藤 廉也		
	地域資料情報	小山内康人 服部 英雄 中野 等		館 卓司	
	極域地図環境 (連携講座)	本吉 洋一	野木 義史 外田 智千		
	経済構造	関 源太郎	北澤 満 堀井 伸浩		
	比較基層文明	宮本 一夫	辻田淳一郎		
	産業資料情報	三輪 宗弘	宮地 英敏		
	日本語教育	松村 瑞子 山村ひろみ 松永 典子	志水 俊広 西山 猛	小森 和子	
国際社会文化			アンドレア・ ゲルマー		
	アジア社会	太田 好信 東 英寿	益尾知佐子	長谷千代子	
	欧米社会	古谷 嘉章 嶋田洋一郎 松井 康浩			
	比較文化	根井 豊	鎗木 政彦 新島 龍美		
	地球自然環境	阿部 芳久 北 逸郎 狩野 彰宏 荒谷 邦雄	石田 清隆 大野 正夫 桑原 義博		中野 伸彦 細谷 忠嗣
	比較政治	大河原伸夫 岡崎 晴輝			
	地球環境保全	黒澤 靖			
	異文化コミュニケーション	小谷 耕二 井上奈良彦	高橋 勤 李 相穆		
	国際言語文化	太田 一昭 阿尾 安泰 松原 孝俊	秋吉 收 福元 圭太		
	生物インベントリー (連携講座)	小野 展嗣	野村 周平 西海 功		

修士課程を修了するためには、一定数の単位を取得し、修士論文を提出して、その審査に合格しなければなりません。開講されている科目としては、一人の教員が担当する「演習」、多面的なテーマについて複数の教員が共同で担当する「総合演習」、調査研究の技法の指導を目的とする「調査研究方法論」、主として論文作成のための指導としての「特別研究」があります。しかし各年度に、そこで実際にどのようなテーマが扱われるか、それが実際にどのような形態で行われるかについては、画一的な形式はありません。多様な学問分野にまたがる多くの教員と多様な関心をもつ学生の相互作用のなかで、それぞれに望ましいかたちをとることになるでしょう。学際的研究教育をめざす本学府では、無用な形式合理性によって自由であるべき知性に足枷をはめたくないからです。また様々な科目をどのように組み合わせるかで履修してゆくかが、学生一人一人の創意工夫にまかされていることは言うまでもありません。「学際的な定食メニュー」などはないのです。

修士論文の執筆は、学生一人一人の研究計画のなかでも最も重要なものです。本学府での研究の成果のすべてが、そこに具体的なかたちをとるのだということさえできます。大体のながれとしては次のようになります。まず1年目の6月中旬に「研究実施計画書」を提出します。それは、修士課程の研究をどのようなスケジュールで進めてゆくか、各自が考え、基本方針を宣言するためのものです。つぎに12月の中旬には、「修士論文計画書」を提出します。これは修士論文の具体的なテーマを定めて、どのように執筆してゆく予定であるかを明らかにしてもらうためのものです。そして2年目の12月には完成した「修士論文」を1月に提出して審査を受けることになります。一人一人が十分な研究計画をたてて、本学府の演習や設備を最大限に活用して研究し、素晴らしい論文を仕上げてくれることを、私たちは望んでいます。もちろん本学府の教員は、そのための

サポートを惜しみませんが、2年間の研究をデザインし、それを実現していく責任は、学生一人一人にあるのだということを忘れないで下さい。

また課程博士取得のための博士論文は、大学院在学中に培った深い専門性と広範な知識、そして研究者としての高い独創性や考察力を基礎に、大学院生活の総力をあげて執筆されるものです。現在ではもちろん、博士論文は研究者としての集大成ではなく、むしろ出発点と位置付けられることが多いのですが、それだけに、研究者としてのそれ以後の大きな発展を予感させるものであることが要求されます。博士論文の提出は、博士学生として2年以上在学し、一定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けているものに認められます。博士課程3年修了時に、博士の学位を取得するための一般的な手順は次のようになります。まず博士後期課程入学後、学期ごとに「博士論文計画書」を作成・提出し、博士論文完成までの行程を指導教員とその都度確認しながら計画的に進めていく必要があります。

次に3年次の最初の学期に公開による「博士論文中間発表」を行うことになります。この「博士論文中間発表」の実施は「論文提出資格申請書類」の要件となっています。中間発表の実施後、指導教員団の承認を得て、この「論文提出資格申請書類」を提出します。

それは、6か月以内に博士論文を完成させることができるという内容を示したものでなければなりません。そして完成した博士論文を11月末、遅くとも年末までに提出します。論文は5名の調査委員によって審査され、公開による論文の調査及び最終試験、教授会での審査をへて、翌年の3月に総長から学位が授与されます。

博士後期課程の3年間は、博士論文を準備する期間としては決して長いものではありません。学生一人ひとりの計画的な研究生活と、指導教員との密接な連携によって可能になるものです。

九州大学では大学改革の一環として、平成12年度から「研究院制度」を導入しています。「研究院制度」というのは、大学院における教育と研究の基本組織であった研究科を学生諸氏が所属する教育組織としての「学府」と教員が所属する「研究院」とに分離するものです。このことによって、従来の研究科で行われてきた教育内容やカリキュラムなどが直ちに変わるわけではありませんが、そうすることによって将来的により効果的な研究教育活動ができることをめざしています。参考までに紹介しますと、比較社会文化研究院は環境変動、社会情報、そして文化空間の3部門編成で、環境変動部門には地球変動、生物多様性、基層構造の3講座が、社会情報部門には歴史資料情報、社会変動、国際社会情報の3講座が、そして文化空間部門には文化動態、文化表象の2講座があります。この他に、連携講座として極域地圏環境と生物インベントリーがあります。つまり、全体で3部門10講座です。教員の研究院での配置状況は表のとおりです。念のためにいいますと、教員は学府の専攻や講座とは異なるところに所属しており、学府と研究院では講座の名称も構成員も異なっています。このパンフレットは教育組織としての紹介を第一にしていますから、学府に関する記述を主としています。33頁以下の専攻・講座別の教員紹介は学府のそれによります。

比較社会文化研究院教員名簿

部門	講座	教授	准教授	講師	助教
環境変動	地球変動	小山内康人 北逸郎 狩野彰宏	桑原 義博 石田 清隆 大野 正夫		
	生物多様性	阿部 芳久 荒谷 邦雄		舘 卓司	中野 伸彦 細谷 忠嗣
	基層構造	田中 良之 中橋 孝博	溝口 孝司 佐藤 廉也		
	生物インベントリー (連携講座)	小野 展嗣	野村 周平 西海 功		
	極域地圏環境 (連携講座)	本吉 洋一	野木 義史 外田 智千		
社会情報	歴史資料情報	吉田 昌彦 服部 英雄 高野 信治 中野 等			
	社会変動	吉岡 齐 清水 靖久 三隅 一百	山下 潤 施 光恒 阿部 康久		
	国際社会情報	松井 康浩 松永 典子	杉山あかし 益尾知佐子		
文化空間	文化動態	根井 豊 古谷 嘉章	鍋木 政彦 新島 龍美		
	文化表象	松本 常彦 太田 好信 嶋田洋一郎 東 英寿	西野 常夫 波瀾 剛 直野 章子	長谷千代子	

研究・教育プログラムについて

この学府は、専門のディシプリンから見れば様々な領域に分かれています。しかし、だからといって、あらゆる研究テーマに応じて、教育・研究指導ができるわけではありません。率直に言って、教員の側から与えられることは限られています。

理想として、私たちが考えているのは、まず学生自身が明確な問題意識をもち、それを深め研究してゆくために、みずから従来の狭い学問区分を越え、異なる分野を結びつけながら進んでゆくことです。もちろん、研究の基礎となる特定のディシプリンをしっかりと勉強しなければならないことは言うまでもありません。しかし、そこに自閉し安住してはなりません。

グローバル化が進展し、社会も文化も急速に変化しつつある現在、研究の対象や問題の表れ方自体が変わってきています。それに応じて、学問のあり方も変わってゆかねばならないことを、私たちは自覚しています。学生諸氏の自由で柔軟な発想と思考が、新しい研究の領域とスタイルを切り開いてゆく可能性を信じています。だから、積極的で型破りと言われるような熱意をパワーのある学生を求めているのです。

そうした学生の自主性を尊重し伸ばしてゆくために、この学府では、関連する研究をしている複数の教員を学生自身が指導教員として選び、異なった視点の導入によって、多面的・総合的に研究を深めることを期待しています。そのために指導教員団という制度を導入しています。

ただし、では具体的にどのようなテーマの研究が可能なのか、教育指導が受けられるかについては、具体的なイメージを描きにくいかもしれません。そ

こで、このセクションでは、複数の教員が密接な連携のもとで実際に研究・教育を行っている（行おうとしている）幾つかのプログラムを紹介します。あるものは、伝統的＝保守的な大学の制度のもとでは、研究の対象とはされてこなかった新しい問題群や研究分野です。あるものは、その分野の第一線の研究者を擁して、学会の最前線を意識したものです。

もちろん、ここに紹介したプログラムは、一例に過ぎません。学生諸氏が、自分の問題意識に即して、各人各様のプログラムを作ることが可能です。むしろ、われわれが思いもつかないような教員の組み合わせによって、新しい問題の学際的な研究を進めてくれることが望ましいのです。

その一方で、この学府には、この分野の研究ならば第一人者という教員が何人もいます。その先生の研究に心酔し、その指導を受けることを求めて入学を希望する学生も大歓迎です。要は、ただ漠然と大学院に進学するのではなく、自分が何を研究したいとかという問題意識＝研究テーマを明確に持ち、この学府がその研究のためにふさわしい場であるかどうかを、よく考え、調べて、納得して入学してきてほしいのです。

そうした判断をするために、各教員の研究に関するさらに詳しい情報が、ホーム・ページ（アドレス：<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/index.php>）で入手することができます。ぜひ活用してください。

歴史を学ぼうとする人々へ

「歴史の芯」を探る……………

「歴史」とは

歴史学は人間社会やそれと相互関係にある環境の変化を追う学問といえよう。しかし、その変化の本質をめぐり、普遍的なもの（近代化論）あるいは目指すべき未来（唯物史観）への変化・進歩という、従来いわれてきたような歴史をめぐるパラダイムの見直しが自覚されは始めている。「歴史」（の変化）

とはそもそも何であるのか。我々歴史を学ぶ者が自らの努力でそれを見つけだすことが必要だろう。

その際、いくつかの観点が考えられよう。一つは変化をどのような枠組みでつかまえるのかということだ。例えば、主流的、中心的なものだけに目をうばわれるのではなく、傍流的、周縁的なものを関連づけた、全体的な把握が必要であろう。いわば複眼的

かつ総合的な枠組みである。ミクロな地殻変動（日常性）がマクロな社会変動（政治・経済問題）といかに連動するのか、あるいは中心から周縁の分離・排除がどのようなメカニズムで生じるのか。ただこのような枠組みで変化を捉えるには、傍流・周縁・ミクロな歴史の解析が不可欠でそのためにはデータ（資料）の広がりを読み込みの深さが要請されよう。

歴史の変化とは、先行の時代が有していた価値が後続時代の価値の強制により失われるということでもある。習俗の「矯正」や時間（暦）の統制（国家的）などはそれにあたろう。しかし、むしろ長期的時間のレンジのなかで各時代に通底する根源的・基層的なものに注目する考え方も提示されつつある。このような視覚は、人々の行動様式や意識・感情まで規制してきた歴史的な社会環境を深く探求することに通じる。同時に、いわゆる「国境」を越えて横へ拡がる可能性もある。つまり例えば近代国民国家の自由・平等というような特定階層のみに保証された価値ではなく、人類史にとってより普遍的な価値の発見にもつながるものであろう。かかる人類史的な一貫性の追求は、価値の発見に止まらず、歴史を通じ人類を悩ませるいわば永遠の問題（例えば飢えや抑圧、それに対する反発）、人間存在の諸問題を捉えることにもなる。

「日本史」をみる視角

「日本史」の対象は、他の人文社会科学や「日本史」以外の世界史に比べ考えようによっては自明性が高いだけに、思考の枠組みが安定・パターン化しやすいと思われる。しかし、歴史認識の枠組みは大きな揺らぎの時期を迎えている。与えられた基準によってではなく、歴史を学ぶ者自ら客観性ある歴史認識の方途を探らねばならないだろう。「日本史」をフィールドにいわば「歴史の芯」（変化と一貫性に通有する核心）を、様々な角度（開発、権力、境界、村、運動、史料など）から考察する場が、ここで用意されるメニューであるが、固定的なものではなく必要に応じてフォーメーション変化もありえる。

拡げられる歴史資料学とフィールドワーク

上記の問題意識に答えるべく、本学府は他の大学院と較べてもひと味違う方法的な特色を持つ。

- 1 文献資料（史料）を正確に読む。
- 2 文献資料（史料）の行間に読む。
- 3 文献資料（史料）のウラを読む（史料批判）。
- 4 歴史資料（史料）を拡げる。

図像、地名、景観

- 5 フィールドワークへ

中野教授を中心として比文の多くの歴史系教員が参加している『柳川市史』編纂事業では、大学院生が地域の古文書史料の分析を進め、又、積極的なフィールドワークを行い、各村の古老から話を聞くことによって、有明海の干潟平野における生活の実態を明らかにした。

高野教授は民俗学の成果をとり入れた観点から、近世の人々の生活を叙述して再評価してきた。

服部教授は福岡県教育委員会による「伊良原地域民俗調査」「五ヶ山地域民俗調査」に大学院生とともに参加した。ダムに沈む村の記憶を掘り起こし、記録する作業を通じて、山に生きた人々の生活がよみがえる。

地域資料情報講座では、他にも怡土庄故地、若宮庄故地、佐賀県全域の地名調査、長崎県雲仙市棚田調査など多くのフィールド調査を行っている。大学院生独自のフィールドワークの成果は『地域資料叢書』として刊行中である。

『地域資料叢書 1 村人が語る 17 世紀の村一岡山藩領備前国尾上村総合研究報告書一』東 昇 1997,12,20 刊、『同 2 備後国大田庄故地調査報告書』前原茂雄著 1998,3,27 刊、『同 3 青方文書の研究』吉原弘道著 1999,11,20 刊、『同 4 筑前国怡土庄故地現地調査速報』服部英雄編 1999,12,31 刊、『同 5 歴史史料としての戦国期城郭』中西義昌編 2001,3,20 刊、『同 6 近代における旧藩主家文書の基礎的研究：「旧柳河藩主立花家文書」の検討を中心に』内山一幸著、『同 7 対馬トボフィリアー 2003 年村落調査報告書』本田佳奈著 2004,11 刊行、『同 8 中世景観の復原と民衆像一史料としての地名論』服部英雄編 2004,6 刊行、『同 9 新・荳生槇山風土記』楠瀬慶太著 2008,3 刊行、『同 10 怡土・志摩の村を歩く』楠瀬慶太著 2009,3 刊行、フィールドワークの成果は地元新聞社にも取り上げられるなど、注目されている。

さてこうした方法上の特色を持ちつつ、本学府の各教員は現在下記のようなテーマを追求している。



比較社会史の研究

（服部英雄教授ほか関係教員）

このテーマは 2002 年度からはじまった 21 世紀 COE プログラム「東アジアと日本：交流と変容」における研究領域の一つです。人文学研究院との協同のもと、新たなアジア／日本認識の形成をコンセプトに具体的には次のような研究課題が構想されています。

- ・日本を含む東アジアの諸社会集団と統治体制の比較研究
- ・生活世界の展開と暗黙知の生成の研究
- ・アジア諸国家における固有法と継受法の研究
- ・史料の形態・様式・機能の比較研究

ところで、このプロジェクトは単に研究体制の構築を目指すものではなく、むしろ人材の育成を主眼にいたものです。アジアから世界に発信しうる研究者・高度専門職業人の育成を念頭に大学院教育はますます充実した刺激的なものとなっていくでしょう。

「境界」を問い直す

(高野信治教授・中野等教授)

国民国家という概念が相対化されようとする現在、その枠組みの中で育まれてきた歴史研究もこれまでの構造や価値観を問い直すべき地平に立っていると云ってよい。すなわち、日本史研究にあっても「日本」という枠組みを前提としつつも、それを絶対視するという態度では新たな「日本史」像を描ききることも困難であろう。原始古代・中世・近世・近現代といった時代区分についても然りである。大きな時代変革のうねりを一つの「国家」的フレームに納め込み、予定調和的に論断する姿勢は退けられなければならない。また、歴史学の今日的意義を考えると、一つの「時代」・「社会」の動きを身分や階級といった視点から二項対立的に論じて事足りるとする訳にはいかない。国民国家がかたちづかった「境界」を取り払うことから、新たな「日本史」研究がはじまるように、ここでの「境界」はこれまでの歴史研究が前提としてきたあらゆる枠組み・構造・ファクターを象徴する。こうした既成的価値観の相対比が比較社会文化学府における歴史研究の第一歩である。

「権力」へのアプローチ

(吉田昌彦教授)

今日の日本史研究において権力というものを考えるとき、非対称型の単一権力システムというイメージが規定性を発揮しているようである。

この非対称型とは、命令者Aと受命者Bとは非対

称的關係にあり命令者Aは受命者Bに対し圧倒的な力を有し、その意志をBに押し付けることが可能、というものであり、国家は一方的な命令者であるとする。この権力観は、国王が王権神授説により独自の正統性を獲得して教皇権威より独立するとともにその力を強め、それまで力を有していた貴族達ら中間的諸団体を形骸化、解体化し権力を一元化させたという西欧絶対主義王政以降の近代欧米国家の権力形態をモデルとしたものである。

この権力観は、階層の上下と社会的資源（権力、権威、富、地位など）占有の大小は対応するという社会学の通則に適合しているが、今日、フーコの規律的監視的権力論などにより相対化されている。

しかし、日本史研究、特にその前近代研究においては、なお、その呪縛から逃れ出ていないような気がする。

日本の近世においては、中間的諸団体の在地領主が中央統一権力化する一方、「古代王権」の天皇が中央統一権力者に対する正統性付与者として残置しており、非対称型の単一権力システムの基礎を作った西欧モデルと異なっているとともに社会学の通則に齟齬する部分が存在することは明らかであろう。

このため、非対称型の機械的適用ではない日本前近代の実態に適合した権力モデルの構築が必要であろう。

その際、単に「上から権力」というモデルではなく共同体などの自律性や利害のなかで派生してくる権力、それらの複数の権力を調整、統合するものとしての上部権力の在り方を検討する必要がある。そして、かかる分析を通じて近代国民国家、「公」観念の萌芽、もしくは受容の前提の解明につながっていくであろう。

カルチュラル・スタディーズを学ぶ人に

カルチュラル・スタディーズはその名前の通り「文化」についての研究です。また、「スタディーズ」という複数形が示唆しているように、欧米だけでなく、アジア、ラテン・アメリカ、オーストラリアなどの場において、多様な形で実践され、互いに交流・影響しあい、変化しています。この新しい研究領域は、「文化」が「政治」や「経済」といった他のカテゴリーに対してどのように影響を与え、決定因子になっているのか、さらには「政治」、「経済」、「文化」といったそれぞれのカテゴリー自体が、どのような権力関係によって形成されているのかということを検証することで、既存の学問領域を組み替えていこうという学際的な試みです。

カルチュラル・スタディーズは、これまでアカデミズムの中でほとんど論じられなかった文化領域に立ち入ります。ロックやR&Bなどの大衆音楽、テレビや広告といったマス・メディア、さらには記念

碑、証言、ロマンス小説、アニメやコンピューター・カルチャーなどがその例として挙げられるでしょう。また、フェミニズム、ゲイ・レズビアン運動や移民権利運動、反グローバリズム闘争などを含む社会運動に関わりつつ、それらを研究対象とします。

こうした領域はランダムに選ばれているわけではありません。これらはすべて、これまで自明のものとされていた「文化」の概念の再検討を要請します。国民国家、人種、エスニシティを均質な単位として前提にした文化、あるいは既存のジェンダーやセクシュアリティの枠組みに沿った男根主義的な文化、「西欧」対「非西欧」と区別される文化などを別の視点から再検討しつつ、それが権力抗争や交渉などを介しつつさまざまな矛盾をはらみながら構築されていくようすを分析しようというものです。それは、分析者が「対象」と心地よい距離を保ちつつ行うのではなく、大学が研究・教育の場としていか

なる知を（再）生産しているのか、それがレイシズム、帝国主義、（ヘテロ）セクシズムなどにどう関わっているのかを批判的・自省的に考察していこうという試みでもあります。つまり、カルチュラル・スタディーズを学ぶとは、自分自身を含む文化・政治領域への介入を行うということ余儀なくされることでもあります。

カルチュラル・スタディーズのプログラムは、複数の教員が学生の皆さんと共に作っています。社会学からは杉山あかし、直野章子、文化人類学からは太田好信、古谷嘉章、哲学からは鍋本政彦、文学からは波瀾剛、松本常彦の各教員が相互連携を図りながら、歴史学、社会思想史等の領域を交えた学際的な共同研究・教育にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

このプログラムは大きく二つのパートに分かれます。ひとつは、基本文献とされているテキストを読むことです。ここでは、現在カルチュラル・スタディーズと総称される領域において代表的といわれる文献や、カルチュラル・スタディーズの潮流に大

きな影響を与えたマルクス主義、記号論、構造主義、ポスト構造主義、フランクフルト学派などの文化理論の再読や最近のフェミニズムをめぐる論争、ポストコロニアル批評との節合も含まれます。これらのテキストは、上に挙げた7人の教員が各自開講するセミナーで取り上げられることになります。

もうひとつのパートは、カルチュラル・スタディーズの実践です。これは、「西欧のカルチュラル・スタディーズ」の理論を日本の文化的文脈に応用する、ということの意味しているものではありません。カルチュラル・スタディーズが知識の生産における西欧と非西欧の非対称性を問題にしている以上、ここで求められているのは日本国内の既存の学問領域はもちろんのこと、カルチュラル・スタディーズを含む西欧の人文科学全体を批判的に捉え、具体的にどのように干渉していくのかということになります。これは、院生のみなさんが、各自取り組んでいく修士・博士論文のプロジェクトを通して実践していくことになります。

社会学を学びたい人のために

1. 本学府における「社会学」

本学府では研究対象・方法・立場、それぞれに異なるメンバーが社会学分野に関わる研究・教育活動を行っています。各人の研究を列挙すれば、次のようになります。

◎**吉岡 斉（教授）**：科学技術開発政策、特に原子力政策の問題を制度論的な方向から厳しく批判していく研究を中心に、社会における科学のあり方について広範に研究を展開中。最近さらには医療について造詣を深めている。

◎**三隅 一（教授）**：様々な社会事象を数理モデルとして分析する数理社会学、社会の実態を統計調査によって解き明かす実証研究、そして地域社会の問題と取り組む都市社会学といった分野の研究を精力的に推進中。

◎**杉山あかし（准教授）**：情報化、メディア、ネットワーク、大衆文化といった問題についての批判社会学的研究、マス・コミュニケーション効果論、そして社会進化論についての批判的検討を中心とする社会理論、といったものと格闘中。

◎**直野章子（准教授）**：カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム。

以上のように多様な課題をそれぞれが自由に追求しているところが本学府の特色です。

この多様性はゼミの開講についても反映されています。本学府では教授・助教授各人がそれぞれ個人でゼミを開講しているのと共に、複数教員によって運営される総合演習というものが開講されています

が、社会学と関わりのある総合演習は一つではありません。

制度論的な議論が中心の吉岡は社会構造論総合演習に主に参加し、歴史学の教員と共に活動しております。

他方、三隅と杉山、直野は、共同で社会学総合演習を実施しております。ここではオーソドックスな社会学分野については主に三隅が、葛藤理論や文化的再生産論、イデオロギー論、あるいは現象学的社会学やアイデンティティ論といったクリティカルな社会学分野については主に杉山が議論し、直野はカルチュラル・スタディーズとフェミニズムについて議論しております。

2. 学生は何を、どうやって学ぶことができるのか

学生は吉岡・三隅・杉山・直野がそれぞれ開講するゼミと、総合演習において社会学関係の教育訓練を受けることができます。また、研究課題に応じて社会学分野以外のゼミにも出席することになります。

本学府では指導教員団制度をとっていますので、指導教員は3人程度いることになります。全員を社会学系の教員とすることができれば、関係の深い隣接分野の教員に加わってもらうこともできます。

調査研究方法論については、三隅・杉山・直野は文化人類学の教員と共同で社会調査方法論演習を開講しており、アンケート調査、内容分析、フィール

ドワークなどについて学ぶことができます。このゼミの他にもいくつか社会調査士制度に対応した科目を開講していますので、本学府で専門社会調査士資格を取得することができます。(ただし学部で社会調査士を取得していない場合は、同時にいくつかの学部科目を履修する必要があります。)

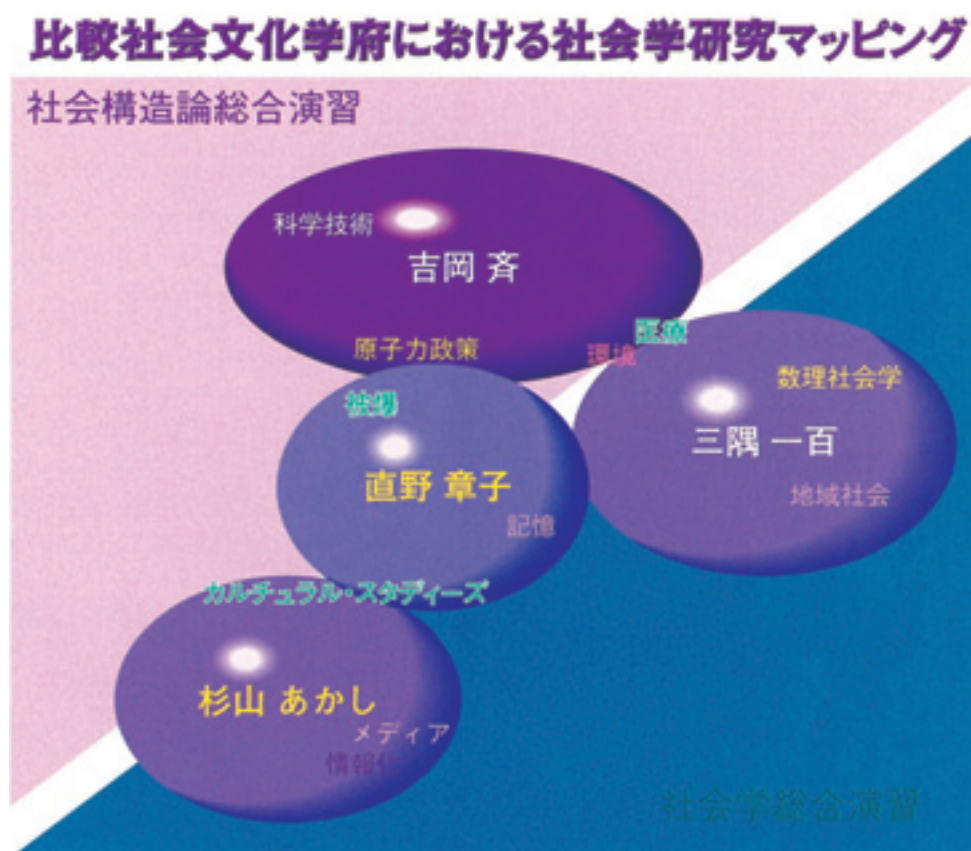
修士論文・博士論文の作成にあたっては個別に個人指導を受ける事になります。

3. 最後に——社会学総合演習のことなど

学際的な研究は既存のディシプリンを無視して成立することはできません。むしろ学際を目指せばこそ、よりしっかりした足場を持ちたいものです。そうした足場として社会学を志したい諸君は、ぜひ「社会学総合演習」に参加し、社会学の理論と方法論に磨きをかけてください。「社会学総合演習」で

は、文献講読や研究発表を通して社会学の基礎固めを行っています。しかしこのゼミの本来の目的は、社会学を志す教員・院生が集い、互いに対等な立場で議論し切磋琢磨することです。したがってこのゼミから何が得られるかは、皆さんの日頃の努力と積極的な議論への参加にかかっています。

「社会学総合演習」以外にも社会学関連のスタッフが個別に開講しているゼミがあります。また正規の科目とは別に、社会学を深めるチャンスがいろいろあります。例えば箱崎キャンパスや近辺の諸大学の先生方・院生諸君と一緒に定期的に開催している「社会学合同ゼミ」、九大出身者を中心とした「社会分析学会」の定例会、数理・計量に関心のある研究者が集う「数理社会学フォーラム」等々。もちろん目標は世界としても、まずはこれらの研究会やネットワークを活用して、貪欲に自らの社会学を展開されることを希望します。



政治の世界を探検しよう！——政治学分野の紹介

政治学は、研究者の数だけ定義があると言われるほど、規定が難しい学問です。しかし、大まかに述べて、国家や統治行為、政治権力をめぐる理念、思想、歴史、人々の行動様式、文化などを研究する学問分野だと述べる事ができるでしょう。

本学府では、政治学を幅広く学ぶことができます。政治理論、政治思想、日本政治、国際関係論などの各分野です。思想や理論といった基礎的研究、および実際の関心に沿った問題解決的研究の双方が可能です。（国際関係論については別項に、より詳しい説明がありますのでそちらもご覧下さい。）

○各教員の研究や授業の主題

各教員の研究関心、および担当している演習の今年度のテーマは次のようなものです。

大河原伸夫：

「政治」は私たちの思考枠組みと密接に関連しています。私たちの思考枠組みに検討を加え、現在の「政治」を批判的に考察することを課題としています。特に「力」や集合的な行動主体に焦点をあてています。授業では以上を踏まえつつ、受講者の必要に応じて、テキストを読むこともあり受講者が研究報告・書評を行うこともあります。

清水靖久：

日本政治思想史を研究しています。これまで主として20世紀初頭の民主主義や社会主義や平和主義の思想を調べてきましたが、これからは広く20世紀を通して、さまざまな政治思想を研究したいと思います。

鍋木政彦：

専攻は政治思想史、ドイツ思想史。19世紀後半から20世紀初頭にかけての思想的転換のもつ政治思想的意義の究明を課題としています。最近、思想史的背景を踏まえた社会科学の成立史に興味があります。大学院ゼミでは、近現代の思想史や社会科学の古典を読むようにしています。

岡崎晴輝：

政治理論専攻。市民自治の政治理論を構築することを模索しています。比文の演習では、主要な政治理論を把握できるようになることに主眼をおいています。私のホームページ（<http://www1.ocn.ne.jp/~aktiv/>）がありますので、ご笑覧ください。

施光恒：

政治理論、政治哲学。特に、現代リベラリズム論、人権論。最近、主に、リベラルな国家における文化やナショナリティの適切な位置づけのあり方に関し、研究を進めています。大学院の演習では、「ナショナリズムとコスモポリタニズム」、「人権理念と文化」などのテーマの下、議論しています。

松井康浩：

政治社会史及び国際関係論を専門にしています。大学

院の演習では、近年の国際関係理論の動向をフォローし、特に、国際社会の規範理論、地域安全保障論、国際関係におけるコミュニタリアニズム等を考察していきます。

益尾知佐子：

国際政治（主として東アジア）、および現代中国の政治。大学院のゼミのテーマは毎回変わりますが、中国外交（史）、東アジアの国際関係（史）や安全保障に関する問題を多く取り上げています。

○総合演習、論文指導、研究会について

各教員が上記で言及している個別に担当する演習とは別に、複数の教員で担当する「総合演習」があります。政治学関係のものとしては、大河原・岡崎の担当する比較政治の総合演習、高田・松井の担当する国際関係論の総合演習、および清水・施の担当する政治思想・理論の総合演習の三つが開講されています。それぞれの時間では、主に、受講の院生が研究発表を行い、皆でそれについて議論するというかたちをとっています。

論文指導に関してですが、本学府では、個々の院生ごとに、複数（3人程度）の教員で「指導教員団」を組織し指導するという体制をとっています。各院生自身の研究テーマに応じて、教員を選び、指導教員団を組織することができます。その際に、全員を上記の7人のうちから選んでもかまいませんし、歴史学、社会学、文学などの他の関連分野の教員を選び、指導教員団を組織することももちろん可能です。既存の学問分野にとらわれない学際性を特色のひとつとする本学府ですから、学際的指導教員団を組織することは大いに歓迎されます。

最近の院生の論文のテーマをいくつか挙げてみますと、「日本の地方自治と民主主義」、「明六雑誌にみられる自由観」、「19世紀イギリス思想——ジョン・ラスキンを中心に」、「コスモポリタニズムの可能性と問題点」、「第一次大戦期の日露関係史」、「東アジア地域協力に関する中国の対外政策」など、多岐に渡っています。

本学府の正規の授業ではないですが、研究を深め、学術的報告の技量を磨き、人的なネットワークを広げる場として本学府の政治学関係の多くの院生が利用しているものに、学内外の研究会があります。主なものとして、法学府の政治学関係の教員や院生が多く参加する「九州大学政治研究会」や、九州大学だけでなく福岡大学などの近隣の大学の政治思想関係の教員や院生が集う「思想史研究会（九州北部）」、1985年以来20余年に渡り月例会を開いている「ソ連・東欧史研究会」などが挙げられます。

以上のように、本学府では、さまざまな教員や他の院生との出会いを通じて、また多様な機会を利用して、政治学を幅広く学ぶことが可能です。意欲ある皆さんの入学を一同、心より期待しています。

国際関係論・国際社会論のすすめ

【国家間関係から多層的国際関係へ】

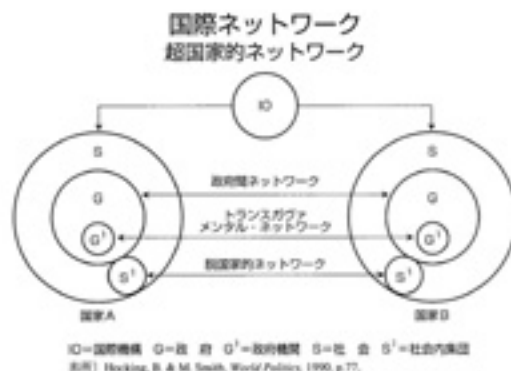
とくに近年、国際関係は現象として広大な拡がり
りと人々の日常生活にまでおよぶ深みをそなえて
きた。国際関係を国家間の関係としてのみ取り扱う
時代はすでに遠く過ぎ去ってしまった。しかも現代
の国家は問題解決能力を低下させて、その「欠陥ば
り」が目立ち、地球的問題群、世界経済、安全保障
のあり方など私たちを取り巻く国際環境は一国の政
府の存在自体に非常な試練を課している。その一方
で、非国家的行為主体の活動が華々しくなっている。
各種の NGO をはじめとして、多国籍企業や国際機
構、そして一人ひとりの市民が国境を越えて交流し
相互に影響を与えながら、いわば「超国家間関係
(trans-national relations)」を創り出している。
なかでも、「地域」は特徴的な位置に占めて国家と
国際社会全体をつなぐ媒介項としてその重要性を高
めている。したがって、いま求められているのは、こ
れら多様な行為主体の行動をトータルに把握する多
層的な国際関係論であるが、「超国家間関係」を「国
際社会論」として取り扱うこともひとつの試みであ
らう。

【学際性と地域研究】

このように対象とする現象は限りなく複雑に絡み
合い多方面に入り込んでいるから、当然、その本質
を把握しようとするれば、国際関係論や国際社会論
は専門的諸科学を総合的に組織して活用しなくては
ならない。そこではひとつのディシプリンに固執する
ことはかえって有害ですらあり、方法論において学
際性を追求することは大切であろう。広領域におよ
ぶ現象分析には、旧来のパラダイムにとらわれない
柔軟な頭脳が求められる。しかし、われわれは単な
る理論的仮説の組み立てでここに満足するわけでは
決してない。対象に肉薄するためには地域研究をと
もなう実態の調査・研究が不可欠であり、思い込み
や理想論の一方的強調や理論倒れに陥りやすいこの
分野ではとくにそれが求められるであろう。ここで
いう地域研究は対象の歴史、政治、経済、社会など
を具体的に究明しようとするものであって、フィー
ルド・ワークをともなうことが多いのである。

【広がりゆく国際関係論のテーマ】

本学府では、松井康浩（欧米社会講座）と益尾知
佐子（アジア社会講座）の二人が、国際関係論の分
野の講義を担当し、学生指導にあたっています。松
井は、国際関係理論の研究とロシアをはじめとした
スラブ・ユーラシア地域の歴史研究、益尾は、中
国の対外政策を中心とする東アジア地域の国際関係
研究に主に携わっています。しかし本学府では、教員
の研究テーマに縛られることなく、歴史研究から現
状分析に至るまで、国際関係分野に係わりのある幅



広いテーマを探究する院生の研究指導を行います。

大学院生の研究テーマの例

- ・ 国連安全保障理事会の権威と正当性
- ・ 人道的介入をめぐるグローバル規範と現場の実践
- ・ リベラル・ナショナリズム論の国際秩序構想
- ・ 1940年代のアメリカの太平洋戦略
- ・ 1960年代のアメリカの対ベトナム政策
- ・ 中国の東アジア共同体論
- ・ 歴史的記憶をめぐるトランスナショナル市民の活動
- ・ サハラ以南少数民族に対する戦前日本の政策
- ・ 現代ロシアの若者の政治意識・青年組織
- ・ エネルギー資源をめぐるカザフスタンと日中露の関係
- ・ 先進諸国の難民政策と国際機構の役割
- ・ 「人間の安全保障」論に基づく北朝鮮への人道支援の可能性
- ・ 日中関係における民間交流の役割

【連絡先】

松井康浩

E-mail matsui@scs.kyushu-u.ac.jp

益尾知佐子

E-mail masuo@scs.kyushu-u.ac.jp



教員及び院生・卒業生による研究成果（2009年度）

言語教育学関連の研究のために

——外国語教育、コミュニケーション技術、等等

九州大学では外国語教育を専門に学べる大学院はないのですか？日本語教育講座はあるけれども、英語教育講座は見当たりませんか？さらに他の言語は？

プレゼンテーションとかディベートとか、コミュニケーション技術の訓練に関心が集まっているけれども、九州大学では研究していないのでしょうか。

そういった理論的・実践的研究に関心がある人々に対して、比較社会文化学府（比文）は対応します。九州大学にはさまざまな事情から外国語教育を専門とする大学院は独立して存在せず、比文の中にも講座としては日本語教育講座しかありません。しかし、英語教育も、ドイツ語教育も、フランス語教育も、中国語教育も、韓国語教育も、外国語教育学も、第二言語習得論も研究することができます。また、プレゼンテーションやディベートのようなコミュニケーション技術教育について研究することもできます。

体系的なカリキュラムは提供できませんが、あなたに強い意欲と意志があれば、多数の関連分野の教員の授業科目を受講し、あなた自身の問題意識をぶつけて研究相談をしてください。言語教育を専門と称する大学院に負けないあなた自身のプログラムを作ることができます。教員が敷いたレールに乗って勉強し、与えられたテーマで論文を書いて大学院を修了するという安易な道ではありません。授業科目がカバーしていないところは自分で読書をし、指導教員と「格闘」して自分の論文の計画を立てないといけなかもしれません。苦労した後の成果は大きいはずです。

言語関係の多くの教員が九州大学の全学教育や留学生センターにおいて、実際に言語を教えています。あなた自身もTA（ティーチング・アシスタント）として実際の言語教育の現場を体験することもできます。また、大学院を担当していないけれども言語教育関係を専門とするさらに多くの教員と話し、指導を受けることもできるでしょう。

外国語教育学やコミュニケーション技術の研究は数多くの分野から方法論や理論を援用して研究が行われる学際的な分野です。下記に挙げた教員が専門とする言語学、コミュニケーション学、文学（アジアや欧米の言語文化）などの関連学問分野だけではなく、さらに比文に専門家を擁するさまざまな分野（社会学、文化人類学、国際関係論など）からの研究

の支援を得ることもあるでしょう。多様な研究分野に触れることによって、外国語教育やコミュニケーション技術に関する実践的な問題意識から大学院での研究課題としてまとめる手がかりができます。

これまでの研究テーマの一部は比文の Web サイトで過去の修士論文・博士論文の題目を見てもらうとわかるでしょう。さらに可能性は広がります。以下に学府担当の関係教員を50音順で列举しておきます。この「豊富な資源」を活用してあなた自身の言語教育学プログラムを目指してみてください。（さらに多くの学府内外の教員の研究分野を含め、詳細は大学 HP の「九州大学研究者情報」等を参照。）

<氏 名>（講座名：関連専門分野：全学教育担当科目）
阿尾安泰（国際言：フランス思想：フランス語）
秋吉 収（国際言：中国近代文学：中国語）
李 相穆（異文化：外国語教育学・教育工学：韓国語）
井上奈良彦（異文化：コミュニケーション学、言語教育学：英語・議論法とディベート）
太田一昭（国際言：英文学・シェイクスピア研究：英語）
小谷耕二（異文化：米文学・多文化主義：英語）
小森和子（日本語：第二言語の語彙習得論、言語テスト理論、心理言語学：日本語）
嶋田洋一郎（欧米社会：ドイツ思想：ドイツ語）
志水俊広（日本語：第二言語習得論、言語習得における普遍文法の役割、言語教育学：英語）
西山 猛（日本語：日中語対照研究：中国語）
高橋 勤（異文化：アメリカ文学：英語）
東 英寿（アジア社会：中国古典文学：中国語）
福元圭太（国際言：近代ドイツ文学・思想：ドイツ語）
松永典子（日本語：言語政策、異文化コミュニケーション、教育史：歴史と文化）
松原孝俊（国際言：朝鮮語教授法：日韓文化交流史）
松村瑞子（日本語：対照言語学・社会言語学：英語）
山村ひろみ（日本語：スペイン語学、記述言語学、対照言語学：スペイン語）

修士課程を受験希望する方は、専門科目の選択に悩むかもしれません。自身の研究課題やこれまでの学習分野を考慮して、日本語学、西欧言語文化、アジア言語文化、言語学・言語コミュニケーションの中から選択することを勧めます。

日本語教育実践者養成プログラム

—専門性を基盤に学際的・総合的知識・技能の習得を—

〈概要〉

本プログラムは、比較社会文化学府(以下、本学府)が掲げる教育目標・「異なる社会文化の共生」、「学際的に問題解決に取り組む研究者、および高度専門職業人の組織的養成」に沿い、国内外の高等教育機関の連携により、柔軟性・実践力・総合的知識を兼ね備えた日本語教育実践者を養成するための教育に取り組むものです。2007年度、2008年度は、韓国・釜慶大学校人文社会科学大学(本学府の交流協定機関)における日本語教育実習を実施しました。さらに、2009年度より福岡市内の日本語学校での日本語教育実習を実施しています。

〈教育目標〉

文化庁から出された「日本語教育のための教員養成について」では、以下のように、今後日本語教育の分野に求められる新しいニーズが提起されています。(参照 <http://www.bunka.go.jp/1kokugo/>)

- ・日本語ネイティブだけでなく、日本語ノンネイティブの日本語教師の養成
- ・地域社会学校教育における日本語コーディネーターの養成
- ・国語教育や英語教育、中国語教育、韓国語教育といった言語教育全般との連携や研究交流
- ・日本語教育の視点からの異文化間コミュニケーション教育・国際理解教育のあり方の探求

以上のように、日本語教育の分野で社会的に求められる人材は専門性を基盤に、より学際的・総合的な知識・技能を有する者へと変化してきています。それに伴い、日本語教育実践者養成に関する教育内容は従来に比べ、多岐にわたる領域に変化してきていると言えます。つまり、教育・言語・文化に関わる基礎的研究領域のみならず、社会・地域・関連諸分野との連携等、新たな学際的研究領域の創出が重要視されてきているのです。

こういった社会的要請を踏まえた場合、当学府が提供する教育プログラムでは、以下の3点を備えた人材を養成することを目標と考えています。

- 明確な問題意識、確かな専門知識に裏打ちされた批判意識、異質なものに対しても、柔軟に対処し得る感受性・柔軟性
- 受信し考えるだけでなく、発信し行動する実践力
- 日本と社会との相互理解を推進させるための日本及び海外諸地域の社会・文化に関する総合的知識

〈学際的・総合的教育内容・学際的アプローチ〉

当学府日本語教育講座が提供する教育プログラムの特徴は、以下の2点です。

- 専門的知識・技能のみならず、関連分野の知識・技能を学際的アプローチ・総合的教育内容により

修得できる体制となっている点

- 従来の人材養成の成果・蓄積を再活用することで、海外(主に韓国・中国)の高等教育機関との連携が可能であり、日本のみならず海外諸地域の社会・文化に関する総合的知識を修得できる点

〈例〉東アジア言語フォーラム(北九州言語研究会・韓国仁川大学校・上海外国語大学)の共同開催。フォーラムでは、学生も毎年、研究報告を精力的に行っています。

現在、卒業生の多くは国内外の大学をはじめとする日本語教育関係の職場及び民間企業等で活躍しています。今後、新たな活躍の場を創り出していくのは、学府が求める人材である「発信者」としてのあなた自身です。(参照:日本語教育講座ホームページ <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/%7Enihongo/>)

〈各教員の研究テーマ・問題関心とゼミのテーマ〉

松村瑞子(まつむら・よしこ) 教授

社会言語学、対照言語学、特に意味・語用論を中心に研究を行っています。具体的には様々の言語事象に対して意味・語用論的な説明を与える研究、更に日本語と他言語の丁寧戦略の相違や男女差を社会言語学的な観点から分析しています。言語教育に役立つ言語学を目指しています。

山村ひろみ(やまむら・ひろみ) 教授

専門はスペイン語学。最近では、対象をスペイン語と系統を同じくする言語のみならず、日本語を始めとする系統も類型も異なる言語までに広げ、特に、言語と「時」の関係を人間の認知のあり方という観点から考察しています。担当の「日本語言語学」では、日本語に特徴的な言語現象を取り上げ、それを体系的に説明するにはどのような観点・枠組みが必要かを考えています。

松永典子(まつなが・のりこ) 教授

教育には教師と学習者の相互理解・信頼関係の構築が不可欠だと考える観点から、異文化間接触、異文化間コミュニケーションの視点を教育研究の中心に据えています。ゼミでは、「文化」を軸に、言語教育における異文化接触・異文化間コミュニケーションの諸問題を検討し、併せて、言語教育の実践に生かせるコミュニケーション上の方策を探っています。

西山猛(にしやま・たけし) 准教授

日本語と中国語の対照研究、特に指示詞・人称代名詞について研究を行っています。日本語対照言語

学では日本語と中国語の対照に関するテーマを扱っています。研究調査方法論ではそれぞれのテーマに従って、例えば日本語と中国語の受け身文などの研究指導を行っています。

志水俊広（しみず・としひろ）准教授

専門は第二言語習得論および英語教育学。特に、日本語母語話者による英語の統語構造の習得を普遍文法の枠組みで解明することや東アジアにおける英語教育に関心があります。これまで主に英語を対象として研究が進んできた第二言語習得論や言語教育学が日本語教育に対してどの程度有効であるのか、また日本語を対象とすることで新たな展開があり得るのかということを追究したいと思います。

小森和子（こもり・かずこ）講師

専門は第二言語としての日本語の語彙習得、語彙処理研究です。特に、日本語学習者が頭の中にどのような心内辞書を構築しているのか、その心内辞書にどのようにアクセスしているのか、アクセスの際に第一言語がどのように関わるのか、という単語認知処理過程を検討しています。また、第二言語の語彙知識の測定、コーパスに基づく同形語の日中共起表現の比較分析、未知語の意味推測などについても研究を進めています。

〈授業の一例〉

○総合演習（日本語教育論）：日本語言語学の基礎を学び、それを日本語教育に応用するにはどうすればよいかについて考えています。前期は日本語音声学・音韻論、後期は日本語統語論・意味論の中で、学習者にとって取り分け問題となる日本語の特徴を中心に、その指導法を考察してっていきます。

〈学生の研究動向〉

対照言語学・社会言語学視点からの研究、教育方法論の研究、文法研究、習得研究（日本語の文法・語彙の習得、言語技能の習得）、インターアクション研究、異文化間コミュニケーション研究などを行っています。

〈関連する学会・研究会案内〉

日本語教育講座の教員、学生が所属している学会・研究会には以下のようなものがあります。博士後期課程の学生を中心に、学生も活発に発表を行っています（順不同）。

「日本語教育学会」「社会言語科学会」「日本語学会」「日本中国語学会」「専門日本語教育学会」「日本語ジェンダー学会」「日本語文法学会」「日本イスパニヤ学会」「日本フランス語学会」「日本ロマンス語学会」「韓日言語文化研究会」「東アジア言語文化フォーラム」「アカデミック・ジャパニーズ研究会」「異文化間教育学会」「多文化関係学会」など。



2007 年日本語教育実習風景（於：韓国） 1



2007 年日本語教育実習風景（於：韓国） 2



2009 年日本語教育実習風景（於：日本語学校） 1



2009 年日本語教育実習風景（於：日本語学校） 2

世界の「韓国研究」へ

韓国研究への誘い



九州大学大学院には、人文科学府・人間環境学府・経済学府や法学府などでも朝鮮研究の優れた研究成果が生まれていますが、我が国際文化専攻国際言語文化講座アジア言語文化コースでは、2002 年度に開設された九州大学韓国研究センターと有機的な連携体制を取りながら、韓国学の次世代研究者の養成に努めています。さらに 2005 年度には、九州大学韓国研究センターが事務局となって、UCLA やソウル大学校など世界の 12 大学で構成された韓国研究コンソーシアムが締結されましたので、今後は世界の韓国学の碩学が講師を務める大学院生対象国際ワークショップなどを通して、次世代研究者養成プログラムが実施されます。したがって九州大学大学院に在籍することで、世界の主要大学韓国研究者との間で学術研究の輪が広がるはずです。

【連絡先】

松原孝俊

koreauok@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

<http://matsu.rcks.kyushu-u.ac.jp/>

1	韓国国際交流財団大学院生対象奨学金の受給者数	2009 年度：4 名（博士課程：1 万ドル、修士課程：7000 ドル）
2	韓国への留学数	2008 年度：10 名／2009 年度：18 名（短期・長期含む）



文化人類学を学びたい、あなたに！

担当教員：太田好信、古谷嘉章

文化人類学には興味はあるけれども、その内容がよく分からず、躊躇している方々、わたしたち教員も、「文化人類学とはどのような学問ですか」と問われて、返答に窮したという経験は数多くあります。その歴史を説明すれば、十分だろうか。その方法論を述べるのが先だろうか。そもそも、この問いへの答えは、人類学者たちの数だけ多様なのだろうか。いっけん本質を突くかのようなこの疑問は、この学問の性質とは相反するため、答えようのない問いなのかもしれません。興味のある方は本学府ならびに、九州大学の他学府の教員が執筆に加わった『メイキング文化人類学』（世界思想社、2005）をご覧ください。解答への手がかりくらいは、発見できるはずです。

さて、本学府における文化人類学教育の特徴は、「文化人類学とは何か」という根源的疑問を考えることを忘れずに、この学問の歴史を学び、それを継承し実践するということです。歴史が重要なのは、知識生産のための方法論しか問題にされなくなっている現在、学問はルーティン化し、「座学連携」というスローガンのもとに、知識と権力が癒着し、学問が自立性を失いつつある状況に抵抗するためです。たとえば、異文化理解としての人類学、フィールドワークの学問としての人類学、周縁化されてきた民族を援助するための基礎知識を提供する人類学、というこの学問に対する一連のイメージ群があります。本学府の文化人類学教育の目標に照らし合わせると、それらのうちひとつだけ正しいものを選択するのではなく、それらが生まれ流通し始めた時代における可能性を現在に生かすためには、それぞれのイメージをどう再解釈する必要があるのかを再帰的に考察することになります。このような再帰的考察を、個人の研究プロジェクトに組み込むということです。

文化人類学のイメージが多様なため、つかみどころのない学問という印象を与えるのは、その対象テーマの多様さにひとつ原因があるのかもしれませんが。タイ北部地域の霊媒たちの活動、フィリピン労働者の世界規模での移動、ルワンダ難民たちの歴史、土塚歌劇団とジェンダー・イデオロギー、先住民の活動と環境保全運動の関係など。論理的には、ここでそれらをすべてまとめていくのが、文化人類学の本質であり、それを知れば、上の疑問には答えることができるはずです。けれども、いまだにそれに成功したという文化人類学者はいないようです。そもそも、本質は変化するものです。

とらえどころのない本質をもつ学問ですから、境界は異物を排斥するためにあるのではなく、境界は越境するためにあります。文化人類学は、異なった学問領域の歴史や問題系を尊重すると同時に、それらと対話しようとする姿勢を保持しています。（簡単にいえば、この学問は学際的なのです。これは論理矛盾ではありません。）

これまでのバックグラウンドが文化人類学ではなくとも、広く人文系学問の素養——たとえば、哲学、文学理論、社会学やカルチュラル・スタディーズ、言語学、歴史学など——があれば、この学問への扉は開かれているのです。

それでは、具体的に文化人類学教育のカリキュラムを紹介します。文化人類学を学ぶ院生は、かならず「文化人類学総合演習」を履修します。通年で6冊の（「古典」といわれている）民族誌を読み、教員全員と博士課程の院生一名を加えゼミ形式の討論

をおこないます。本学府の文化人類学教育では、最近の研究動向だけではなく、文化人類学の基礎知識もしっかり習得することも目標です。次に、各教員の担当する演習を履修します。ここで、最近の研究動向が紹介されることになります。文化人類学以外の領域へと積極的に越境するテーマが選択されます。たとえば、先住民運動と国際法、30年代米国社会と民族誌、未開芸術と博物館展示、グローバル経済と文化のローカル現象などです。（各演習のシラバスは、比較社会文化研究院のHPにて掲載中です。）

修士課程や博士課程の院生たちは、文化人類学以外にも、社会学、歴史学、思想史などの演習にも参加し、自らの研究テーマに生かしています。また、九州大学の人間環境学府（箱崎地区）にて開講されている関一敏教授、浜本満教授、坂元一光教授、飯嶋秀治准教授などの演習を履修することもできます。

現在、修士課程と博士課程に合計9名の学生が在籍しています。たとえば、トヨタ財団の助成を受け、新潟県阿賀野川近郊の村落の再生についてフィールド調査をしている院生、社会主義体制からの移行期にあるモンゴルの少数民族についての研究結果を博士論文に仕上げようとしている院生、メキシコ政府奨学金を受給し、メキシコのベンテコスタル派キリスト教徒の改宗をテーマにした博士論文を執筆中の院生、など多様な院生が学んでいます。

本学府は94年に創設されました。人類学は他の学問領域とは異なり、従来の書斎や古文書館での研究だけではなく、現地語の習得を前提としたフィールド調査が重要な位置を占めてきました。そのため、博士課程を修了するまでに、大学院修士課程入学から数えて10年くらいはかかります。本学府では、これまで文化人類学を主専攻にして、4名が博士号を取得しており、現在数名が博士論文を執筆中です。博士号取得者あるいは博士課程満期退学者のうち3名は、研究者として（旧国立）大学に就職をしています。修士課程を修了した院生は、ほぼ100%就職しています。

これまで本学府で学んだ院生たちの多くは、自立した精神をもち、独自の関心を掘り下げる能力をもった人材でした。いまでも、その伝統は生きています。わたしたち教員は、既存のパラダイムのなかに閉じこもり、パズルを解くこと——自らはパズルをつくりださずに——だけに関心のある小器用さをもった人ではなく、荒削りでも広い知識と関心を大胆に結びつけ、自らの研究課題を構想できる独創性をもった人を求めています。



アマゾン先住民族カトゥキナの未来を担う子供たち

人文地理学を究める一スキルアップしたい方へー

1. 比較社会文化学府における人文地理学教育研究

教育・研究機関の教員や研究者、地域政策分野での専門家等の人材育成をめざして、本学府の地域構造講座と基層構造講座の教員により、人文地理学に関する講義や演習が行われています（講義や演習の詳しい内容は次章以降をご覧ください）。どの講義・演習でも大学院生による人文地理学を基礎とする地域構造や地域政策に関する研究や、高等学校教諭教員免許状（地理歴史、公民）の取得等を支援する教育体制をととのえています。地域構造と地域政策に関しては本学府の教員を中心として、平成18年にはミネルヴァ書房から『地域の構造と地域の政策』が、平成19年には古今書院から『日本・アジアにおける地域の構造と開発』が出版されましたので、そちらもご参照ください。

本大学院設置以降、人文地理学（含む社会開発論）を主な専攻として本学府の博士後期課程・同修士課程を修了した大学院生は、国内外の大学、中等教育機関、国際機関、行政機関、シンクタンク等に就職し、人文地理学の知識や研究成果を活かして、各分野で活躍しています。

2. 人文地理学関係の教員紹介

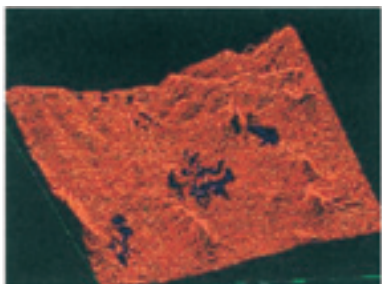
以下では人文地理学関係の3名の教員を紹介します。

山下潤准教授：専門である都市地理学を基礎とし、都市の環境や厚生を対象として、地域構造の視点から各種の地域政策・計画の実態をGIS等を用いて把握するとともに、それらの課題についての研究を深めています。近年は緑地の減少や地球温暖化と都市構造と関係やこれらの環境問題に対処するための地域計画に関する研究をすすめています。

佐藤廉也准教授：文化地理学を専門とし、人類史的な視野から様々な文化における人間行動を研究しています。現在は特に、焼畑移動農耕、山地農耕、狩猟・採集活動など、かつての人類が主要な生業としていた活動を対象とし、環境利用の実態とその人類史的な意味を説明することを課題としています（右図参照）。主にアフリカと中国でフィールド研究をおこない、「森林移動農耕社会の集落動態」、「移動農耕社会の出生・死亡動態と定住化による人口転換」、「森林・サバンナの動態と人間活動の影響」、「中国黄土高原における退耕還林政策と土地利用変化」などの



アフリカの焼畑



森林 GIS による焼畑動態分析

研究プロジェクトをすすめています（上図参照）。

阿部康久准教授：主に中国を対象にした経済地理学的研究を行っています。具体的には、国有企業改革に伴う産業立地と就業構造の変化や人口移動等に関して研究しています。また、最近では大学院生の関心にあわせて、外資系企業の立地や留学生の人口移動とキャリア形成に関する研究も行っています。

3. 講義・演習の内容

平成21年度は、人文地理学と関連した以下のような講義・演習を開講し、大学院生の研究を支援しています。

①講義

山下：「都市政策論」を担当。都市における持続可能性という視点から、受講者と関連文献を輪読し、環境に配慮した地域政策・計画への理解を深めています。

佐藤：「環境と人類」を担当。文化生態学、行動生態学、生態人類学を中心とする諸分野の文献を題材として、人間社会の動態を環境適応との関係において把握することをめざしています。



阿部：「産業地域政策論」を担当。経済地理学を中心にしつつも、受講者の関心に合わせて、様々な視点から地域のあり方を考えていきます。

②調査研究方法論

GIS（地理情報システム）の理論と技術の習得をめざし、実習を中心として講義を進めています。修得された技術は博士論文や修士論文等で活用されています（上図参照）。

③演習

各回のゼミ担当者による発表とゼミ参加者・教員との討議等を通じて、修士論文、博士論文、投稿論文等の完成度を高めるよう努めています。

4. 他の研究院・学外との教育・研究連携

これまで述べた活動が主に本学府内での活動ですが、本学府の人文地理学グループは、学内外の人文地理学関係機関との連携も深めています。たとえば人文科学研究院歴史学部地理学講座と連携し、18年度から全学教育「人文地理学」を、また19年度から比較社会文化学府と人文科学府を横断する総合演習「空間領域ゼミ」を担当しています。くわえて20年度からは、年2回の発表会を実施している福岡地理学会の事務局を引き受け、大学院生に広く口頭発表の機会を提供するよう努めています。国外機関との交流に関しては、平成15年以降、忠南大学校と地域政策に関する共同セミナーを開催し、福岡地理学会と同様に、本学府の大学院生が活発に研究成果を発表しています。【お問い合わせ】山下、佐藤、阿部までご連絡下さい。

たとえば「漫画」を研究したい人に

新しい研究を望む人、従来に無い研究を始めたい人、そういう人に、この大学院は研究の場を提供できます。

例えば、「漫画」は、まだ社会的には、学問として認知されたわけではありません。しかし、そんなこととは無関係に日本の漫画は、出版界における規模、経済効果、社会的影響力等、すでに無視することのできない大きな存在となっています。また、アニメ映画ともども、海外でも高い評価を受けており、日本文化としては例外的な輸出超過分野となっています。

それなのに肝心の日本で、本格的な研究がまだまだというのは寂しいかぎりです。誰か意欲的な学生で、真剣に研究してみたいという人はいないものでしょうか。そういう人にこの大学院は、研究の場を提供することができます。

指導教員団には、どの分野の先生を選んでもけっこうです。何故なら、社会学、文学、言語学、作家と作品論など、自分が何を研究したいか、その研究テーマによって、組み合わせが変わってくるからです。

いま、我々の取り組んでいる内容は次のようなものです。

阿尾安泰

漫画には漫画の「語り方」があります。それがあるために、ごく「自然」に読まれています。その枠組みがどのような文化的条件の規定を受けているのか、いかなる権力関係を前提にしているのかなどの問題を考えていきたいと思います。

松村瑞子

漫画に見られる現代日本語における言語とジェンダーの関わりについて（例えば男女の丁寧さのストラテジーの相違など）社会言語学的に考えていきたいと思います。

波瀾 剛

ある小説がマンガ化される際、マンガというジャンルの特性はどのように浮かび上がるのか。また、そこから小説の特性はどのように見えてくるのか。小説ないしはマンガの映画化、芝居化、ドラマ化といったケースも視野に入れながら、ジャンル間の翻訳について考えてみたい。

阿部康久

経済地理学的観点から産業としての漫画やアニメに関心を持っています。例えば、アニメーターの仕事は、仕事単価が低く、製作過程において海外の現場に外注する場合も多いと考えられます。このように漫画・アニメ業界の産業構造と生産・販売拠点の

立地や流通プロセスについて研究するのは、意義深い研究テーマだと考えます。

杉山あかし

コミックマーケット 66 ではコミックマーケット準備会と共催でコミケ 30 周年記念アンケート調査を実施しました。サークル参加者 37,620 名、一般参加者 1,482 名、スタッフ参加者 336 名という、この種の調査で今まであり得なかった規模で（というか、文化研究分野全体でも空前の）ご回答をいただきました。ここに表れた参加者像は…世の「オタク」観のいかに見当外れなことか。

この他にも、たとえば、

- ①漫画を通じて日本文化の特徴をさぐる。
- ②女性漫画からみた男女共生学。
- ③産業としての漫画、アニメ（外国への売り方、等）を考える。
- ④社会学の立場からのアプローチ。
- ⑤アジアにおける日本漫画の受容と影響。
- ⑥文学研究の方法を用いた作家と作品研究。
- ⑦漫画で村おこし等、地域の活性化への利用。

など、いろいろの研究テーマが考えられるでしょう。

勿論、漫画が好き、だけでは研究者にはなれません。幅広い知識を持った、論文を書く能力のある人で、ユニークなアイデアを持つ人を歓迎します。するどい問題意識を持って、境界を超えて勉強できることが、この大学院の特徴の一つなのです。

新しい学問に限らず、従来の学問でも同じですが、教員の指導は最後には関係ありません。論文をしあげるのは本人なのです。自分が何をやりたいのか、その目的意識のはっきりした人の中から、新しい時代にふさわしい、新しいテーマの研究者が育ってくることを期待します。

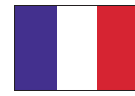
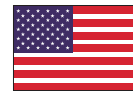
オリジナルな感性を持ち、研究能力があって意欲のある人、狭い範囲に留まらない研究をしたい人…私たちスタッフは、そういう人を募集いたします。



杉山は、コミックマーケット準備会と共同で「コミックマーケット 30 周年記念アンケート調査」（科研費研究）を行ない、コミケット・スペシャル 4（2005 年 3 月 21 日）、コミケット・スペシャル 5 in 水戸（2010 年 3 月 22 日）で結果の発表を行いました。

担当者：太田（一）、阿尾、嶋田

これまで個別的な狭い領域で扱われてきたロマン主義を新たな形で、総合的に研究していくことを目指す。



A：研究方針

1：空間領域の拡大

ロマン主義を国別で考察するだけでなく、その全体の動きを研究する。各研究者（上記担当教員）たちの連関を図りながら、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツにおけるロマン派の動きを追い、主要ヨーロッパの領域とアメリカの状況の把握に努める。

2：時間領域の拡張

ロマン主義は決して 19 世紀だけの事象ではない。着実な研究のために、その思潮が準備された 16 世紀から、その影響が及んでいる現代にまで検討領域を広げる。

3：研究対象の転換

研究対象も従来のように、文学、思想などの領域だけに限定されない。様々な領域の複合的な作用から生み出される文化を研究するために、ロマン主義的感性の生成に関連のある資料を、政治、歴史、社会などの分野からも求める。



B：総合研究テーマ

1：近現代文化論

ロマン主義文化を「知」の問題のひとつと捉え、それを構成する条件を考察する。文学、歴史、思想などの分野の検討にとどまらず、社会科学、文化人類学、精神分析学、医学などの研究動向も踏まえていく。

2：自然表象論

「自然」という表象について考える。自然と文学、自然と人間関係を研究しながら、そこに新たに「環境」やエコロジー等の視点も導入しながら文化の歴史を読み変えていく。

3：文化空間交流論

大きな活動領域を示してきたロマン主義をトータルな形で考える。様々な諸文化空間の影響関係の問題、そして翻訳などを始めとする文化伝達のメディアの問題を考察する。



中国研究を目指すあなたへ！

本ページでは、比文学府にて中国関連の研究をしている教員について紹介します。ご関心がある方は、各教員まで御連絡をお願いいたします。

東 英寿教授

専攻は、唐・宋時代を中心とする中国文学。特に唐宋八大家の一人、歐陽脩（1007～1072）について、文学・哲学・歴史・目録学等の様々な視点から考察しています。さらに、先秦時代から近代に至るまでの中国の文学批評史の訳注にも取り組んでいます。また、江戸時代に刊行された日本の儒学史『漢学紀源』の考察を中心とした日本漢学の研究や中国の少数民族（土家族）の文学・文化の考察も行っています。



頤和園（北京）

秋吉 収准教授

研究分野は、魯迅を中心とした中国近現代文学、日中比較文学、台湾文学などで、また中国現代作家の文章の翻訳紹介などにも取り組んでいます。魯迅は、中国近代文学を代表する偉大な作家ですが、政治的な意味合いもありその評価はまだ完全なものとは言えません。最近私は、その魯迅が芥川龍之介の作品をこっそり(?)模倣していた事実を発見し、学界から大きな反響を得ました。想像以上に強く「共振する」中国と日本を近代文学の視点から探求していきたいと考えています。

堀井伸浩准教授

中国のエネルギー産業分析、環境（大気汚染）問題研究、中国の体制移行と産業構造研究。中国の産業が市場経済への移行によってどのような影響を受け、変容してきたのかに関心があります。また中国の大気汚染問題の研究のように、政策提言を念頭に置いた実践的研究を志向しています。研究室では学部生（多くは日本人）と院生（多くは中国人留学生）がグループワークを行い、中国の様々な産業（例えば、アニメ・漫画、ニュースメディア、物流、航空機、再生可能エネルギー）に関する研究を進めています。



（遼寧省撫順市にて 2002 年に撮影）

阿部康久准教授

経済地理学という分野から中国の地域研究を行っています。具体的には、主に東北地方遼寧省にて、国有企業改革に伴う企業立地の変化や人口移動等について現地調査を行っています。また、最近では大学院生の関心にあわせて、外資系企業の立地状況や機能特性に関する調査や留学生の人口移動とキャリア形成に関する調査も行っており、賃金水準等の雇用環境の変化が企業立地や人の移動にどのような影響を与えているのかという点に関心を持っています。

益尾知佐子准教授

国際政治の観点から中国を研究しています。この数年は、鄧小平が率いた改革開放がどのような国際情勢の下で実現したのか、当時鄧小平が他国（日本や米国）に抱いていた期待はどれくらい叶ったのか、ということに興味を持ってきました。関連して、改革開放時代の中国の内外政策の展開、党の対外関係（の歴史的変化）、対外援助、安全保障政策、軍拡など、中国政治をめぐる諸問題にも関心があります。目下の悩みは、中国でどうすれば資料的価値の高いオーラル・ヒストリーが収集できるかということです。一緒に悩んでくださる方、ぜひご連絡ください。

長谷千代子講師

主に文化人類学的手法で中国の宗教状況について研究しています。宗教は、科学や社会主義の視点からは批判されやすい一方で、社会主義に幻滅した人々や国境地帯に多い少数民族の人々にとっては心の拠り所になるため、現代中国における文化的駆け引きが凝縮して現れるテーマです。主に雲南省徳宏州で、タイ族のお寺にお邪魔しながら調査しています。

経済を分析してみませんか？

○本学府の経済系の特色

経済を分析する学問は、ミクロ経済学・マクロ経済学といった経済理論や、経営管理論・経営組織論といった経営学、その他にも会計学、統計学、経済地理学、マルクス経済学、財政学などなど、数多くに細分化されています。その中で、本学府における経済学系のスタッフが専門とする分野は、経済政策、経済思想、産業経済論などの歴史・現状分析といったものです。特に、日本、中国、イギリスを専門とするスタッフが揃っていますが、学生の研究対象とする国や地域を制限するものではありません。

政策、思想、産業、歴史・現状分析などといっても、すぐにはイメージをしづらいかも知れません。簡単に説明するならば、経済学や経営学の理論そのものを研究対象として精緻化させていくのではなく、現在および過去の様々な経済・経営的な事象を、それらも用いながら分析したり、提言したりする学問なのです。ですから、経済学の理論だけではなく、政治学、歴史学、思想史、地理学などをはじめとした、多くの隣接学問分野との学際的な領域に位置して研究が行われています。

○研究スタッフ

経済系のスタッフは、経済構造講座と産業資料情報講座の2つに5名が属しています。これは学問分野というよりも、学内の教員組織によって分かれているので、学生の皆さんにとっての意味はありません。キャンパスは5人とも箱崎です。

関 源太郎（せき・げんたろう）教授

主に経済学の歴史を研究しています。特に、17世紀から19世紀のイギリスの経済学説に焦点を当て、それらの歴史的・思想的意義を明らかにしようとしています。最近では、18～19世紀スコットランドの貧民救済の経済思想に関心を持つ一方で、「20世紀ブリテンの経済社会改良思想：ニュー・リベラリズムからニュー・レイバーへ」という研究プロジェクトを主宰しています。また、戦後のイギリスの経済思想、特にイギリス労働党のリヴィンジョニストについて研究しています。大学院生とは、現在「改革開放」後の中国の経済社会について勉強しています。

三輪 宗弘（みわ・むねひろ）教授

学問を狭い領域に限定し、自分の専門は「何何だ」という人達がいる。僕はそのような狭隘な学問のあり方には何の関心もない。「学問に境界なし」の精神で、好きな所に飛んでは他流試合で鍛えていくスタイルを取っている。自由な構想や発想が好きですが、それを裏付ける資料に関しては厳格でありたいと考えています。石油問題という視点で日米開戦経緯を研究してきました。それが膨らんでエネルギー問題全般を幅広い視点で取り組んでいます。日本や海外のアーカイブの資料を縦横無尽に駆使して、若い皆さんと知的冒険の旅を思いっきり楽しみたいと思います。（経営史、軍事史）

堀井 伸浩（ほりい・のぶひろ）准教授

中国の産業に関する実証研究を研究室では進めています。アニメ・漫画産業、ニュースメディア産業、物流産業、再生可能エネルギー産業、航空機産業、医薬品産業などです。アプローチは産業経済論を理論的枠組みとし、国際比較（特に日中比較）を活用した実証分析を基本姿勢としています。オリジナルかつシャープな仮説を評価します。一方、私自身はエネルギー産業（特に石炭、電力）と環境産業をテーマとしています。上で挙げた産業に止まらず、新しい産業の研究を志す方の参加を歓迎します。

北澤 満（きたざわ・みつる）准教授

専門は戦前期日本産業史・経営史です。主として、①戦前期における財閥系企業の企業間関係、②戦前期日本石炭産業史、③戦前期日本の農業教育、を対象に研究を進めてきました。今後はいずれの分野についても、戦後復興期・高度経済成長期へと対象時期を広げていく予定です。空間的にも、時間的にも、広い視野で物事をとらえたいと考えている学生に、参加して欲しいと思います。

宮地 英敏（みやち・ひでとし）准教授

中小企業を主たる対象として、歴史分析を中心に行っています。特にこれまでは、陶磁器業を選んで研究してきましたが、最近は福岡銀行や、博多織と呼ばれる絹織物などへと、テーマを広げています。

また、長崎市沖の端島（通称は軍艦島）にも関心があるので、そちらのデータ分析なども手掛けています。中小企業や、北部九州の経済などに興味がある学生は、是非とも顔を出してみてください。

○大学院での目標

皆さんが大学院へ入学する場合に、修士課程を修了して社会で働こうという学生と、博士課程へ進学してさらに学びたいという学生と、両方の学生がいると思われます。そこで、それぞれに分けて、大学院で学んで貰いたいことを簡略に述べておきます。

①修士課程修了で大学を離れる学生：

大学の学部教育とは異なり、大学院教育では、自分でデータや資料を蒐集して、それをもとにして修士論文を書き上げる能力を涵養することが一番に求められます。論文を書くためには、先行研究の学習と、自分のオリジナルな分析の双方が要求されるので、これを2年間かけて習得して貰います。それに加えて、経済に関して修士論文を書くのですから、同時に、社会に出て働くための、経済社会の「常識」も身につけて貰いたいと思っています。

②博士課程への進学を希望する学生：

博士課程への進学を希望するということは、大学もしくは研究所で、研究職に就くためにさらに研究を続けることを意味します。昨今は、研究者としての職を得るためには、学術論文、特に査読付の論文を執筆することが不可欠になっています。経済系は、人文・社会科学の中で、最もそれが要求されます。ですから、①に書いた内容に加えて、いかに査読を通る論文を書けるか、そのトレーニングが大切になります。

○研究対象

経済・経営に関する実証分析であれば、時代やテーマなど、その詳細を限定することはありません。人々が暮らしていく中では、経済活動は欠くことのできないものですから、非常に多様な研究テーマがあり得ます。そのいずれもが、分析対象となる可能性を持っています。

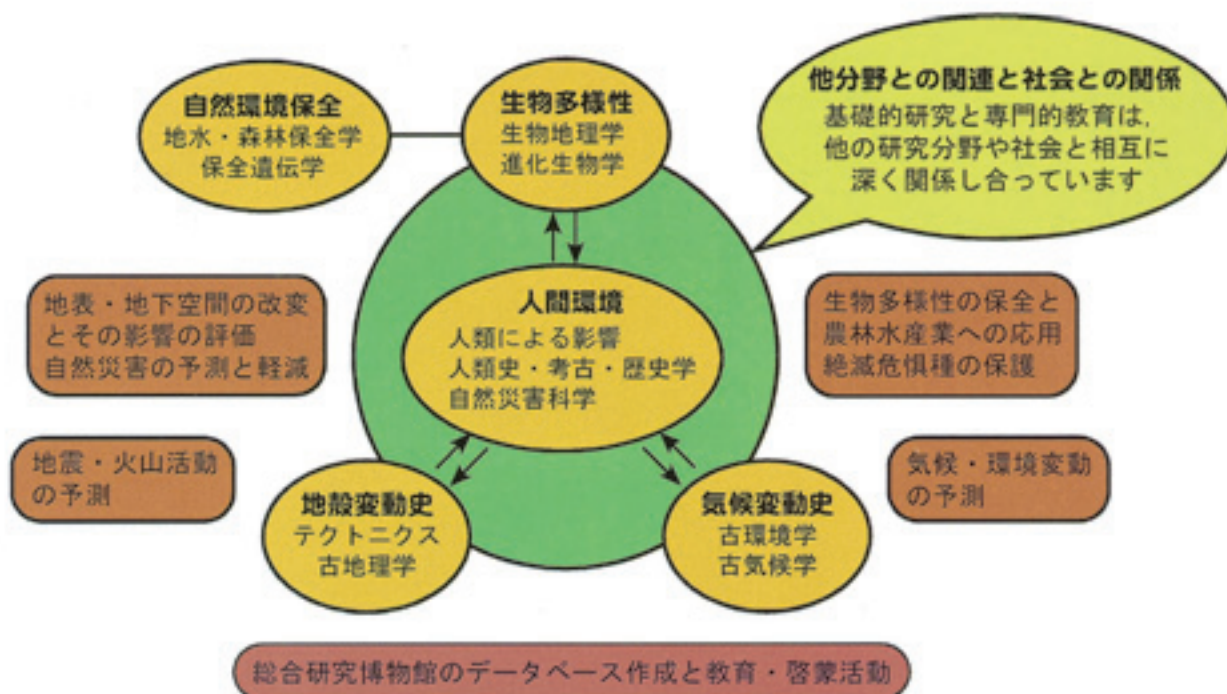
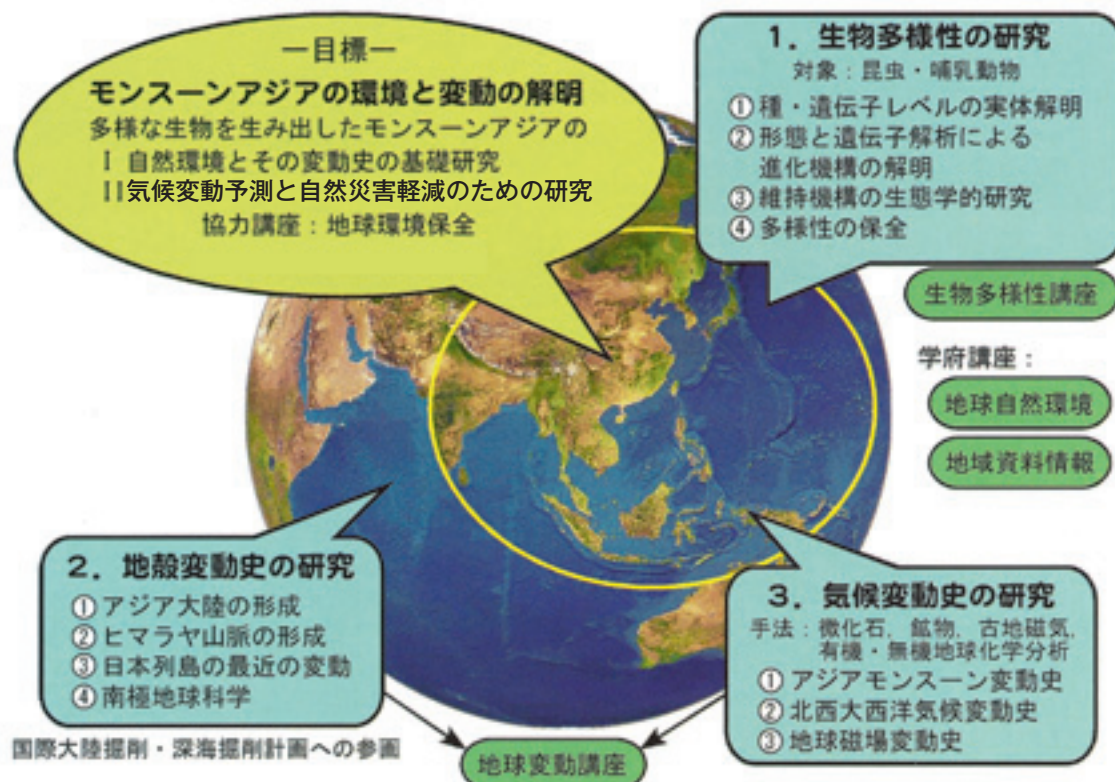
しかし、現状分析にせよ、歴史分析にせよ、政策提言にせよ、論文を執筆するためには豊富なデータが必要になります。経済は実験をすることによってデータを生み出すことが困難な学問であり（シミュレーションにより分析をする経済学分野もありますが、本学府の経済系スタッフには担当はいません）、遥か昔なのか直近なのかの違いはあるにしろ、既に起こった経済的な事象に関するデータ蒐集が重要です。

修士課程の2年間、博士課程の3年間という短い期間で、みなさんは課程修了のための論文を執筆しなければならないので、どのような研究テーマを設定するにしろ、大学院に入学した後は、それぞれのテーマを分析するために、このデータ蒐集に全力を挙げて取り組んで貰います。

○スタッフの所属学会

みなさんの参考のために、スタッフが所属する主な学会を列挙しておきます。「経済学史学会」「産業学会」「比較経済体制学会」「環境経済・政策学会」「九州経済学会」「社会経済史学会」「政治経済学・経済史学会」「経営史学会」「中小企業学会」「企業家研究フォーラム」「イギリス哲学会」「軍事史学会」「日本国際政治学会」etc

比文理系の研究・教育とその展望



<長期ビジョン>
 モンスーンアジアの自然環境の変遷 ⇄ 人類史・歴史とのリンケージの解明
 文理融合型の学際的研究への展開

考古学・人類学メニュー

本学府では、基層構造・比較基層文明・地域資料情報の三講座に所属する考古学・自然人類学専攻の教員が相互に連携しながら、考古学・人類学の研究教育をおこなっている。

基層構造講座は田中良之教授、中橋孝博教授、岩永省三教授、溝口孝司准教授、佐藤廉也准教授の五名で構成される。田中教授は主として縄文土器や他の文化要素を用いた社会動態の研究、及び人骨を用いた原始古代の親族構造・儀礼の研究、中橋教授は日本人起源論をはじめとする形質人類学的研究、岩永教授は弥生時代から古代の社会変動論、溝口准教授は弥生社会論及び理論考古学、佐藤准教授は文化地理学及び生態人類学を専門とする。

比較基層文明講座は、宮本一夫教授と辻田淳一郎准教授から成る。宮本教授は中国における新石器時代から国家段階にわたる社会・文化研究を、辻田准教授は古墳時代の考古学的研究を専門とする。

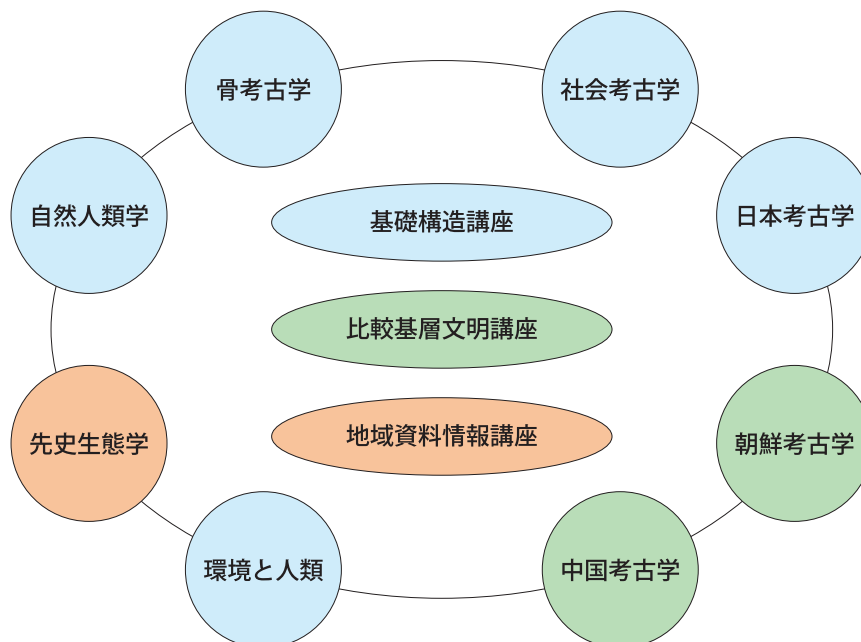
従来の研究区分と対比するならば、日本考古学は基層構造講座、東アジア考古学は比較基層文明講座、人類学は基層構造講座と地域資料情報講座の各教員によって、それぞれカバーされることとなる。しかし、学際大学院の特質を生かして、これらの諸分野

のなかから三名の教員を指導教員として選ぶことにより、これらを柔軟にミックスした研究課題の選定や指導をうけることが可能となる。

院生は、伝統的なテーマの研究はもちろんのこと、学際性に富むテーマへの挑戦もおこなっている。例えばこれまでに、韓国古墳時代の社会構造分析に骨考古学的方法を応用した研究がおこなわれた。また、上にのべた三講座以外の教員を指導教員に加えることによって、近世墓にあらわれた「家」意識に関する修士論文を提出した例もある。指導教員の選択によっては、古人骨の調査法の習得とともに、考古学の先端の理論を学ぶということも可能であり、実際に多くの学生がこのようなメニューを選択している。

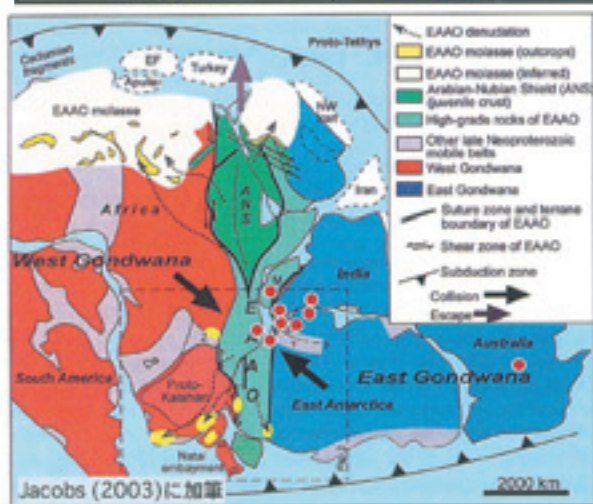
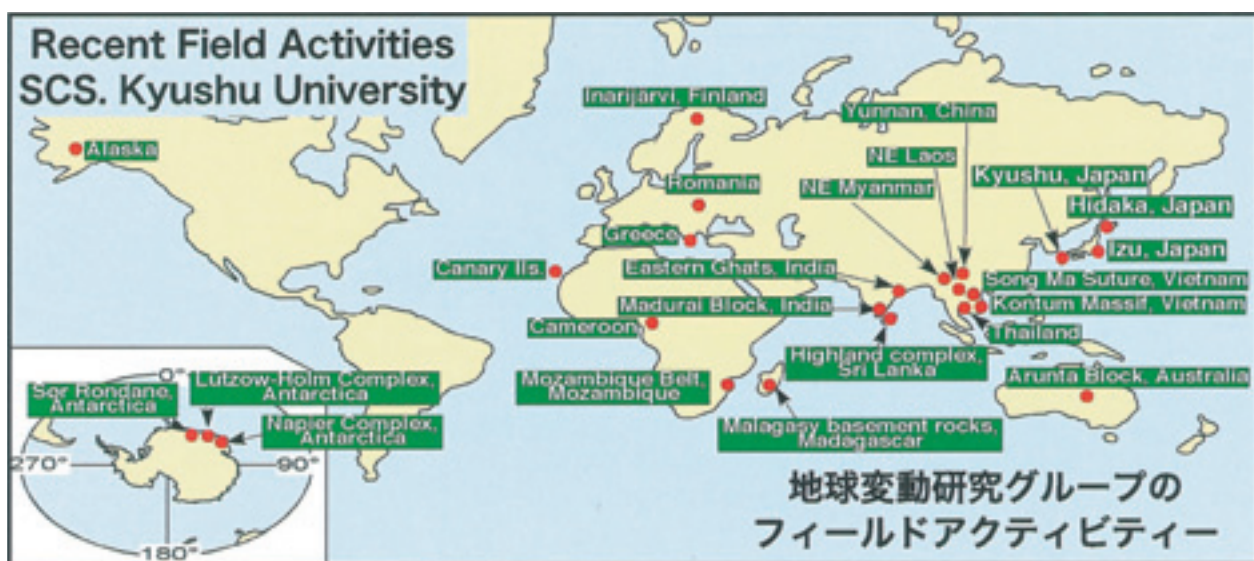
このように、本メニューでは、考古学・人類学を柱としながら、伝統的な研究テーマはもちろんのこと、学際的テーマの専攻を可能とする指導体制をとっているのである。

下図にテーマと講座の関係を色わけで示した。学生はここにあげたテーマを柔軟にミックスした研究課題を選定し指導をうけることができる。



地球創生期から現在まで

フィールドワークから地球変動現象を探る



復元された Gondwana 超大陸における地球変動グループの調査地域（赤丸）
現在は環インド洋に広がる調査地域も、Gondwana 超大陸の時代には超大陸中央部に集中していたことがわかる

本研究グループで進行中の主な研究課題

- ◆ 極東ユーラシア（アジア）の大陸地殻形成過程
- ◆ Gondwana・ロディニア超大陸の形成・分裂過程
- ◆ 国内各地の変成帯の総合解析
- ◆ 極限変成作用の精密解析
- ◆ 東アジアの第四紀競争的マグマ活動
- ◆ 地中海地域のサブダクションに関するマグマ活動
- ◆ 大西洋地域火山体の地球物理学的観測
- ◆ 伊豆半島東方沖地震の地球科学
- ◆ 地球創生期の始原的大陸地殻形成機構
- ◆ 南極地球科学の総合解析

地域資料情報講座：小山内康人 教授

地球自然環境講座：北 逸郎 教授

// 大野正夫 准教授

// 中野伸彦 助教

極域地圏環境講座：本吉洋一 客員教授

// 外田智千 客員准教授

URL: <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/>

地球変動研究グループでは、地質学、岩石学、地球化学、地球物理学の様々な手法を駆使して、40 億年を越える地球創生期の大陸形成から現在の活発なマグマ活動にいたる全地球史的な地球変動現象を研究対象とし、熱帯ジャングルから極域までの汎地球規模でフィールドワークを展開している。得られた試料は、精密かつ最新の分析・実験システムで解析を行っている。

大学院生も、国内はもとより世界各地で意欲的にフィールドワークを実施し、科学を推進する上で重要な“発見”する醍醐味を体験している。国立極地研究所・地圏研究グループによる連携大学院講座も設置されており、本学大学院学生として、南極・北極の調査観測に参加することも可能である。



東南極・太古代ナビア岩体の調査



噴火直後の雲仙火山を調査する



東アジアのプレート拡大地域とフィリピン海プレートの沈み込み帯の境界領域に位置する別府ー島原地溝帯のオープニングとその中の異なるマグマの同地域・同時代の競争的活動

気候変動予測のための古気候解析

科学技術の進歩に伴い大量に消費される石油や石炭は、光合成という奇跡的な生命の営みの遺産に他ならない。植物と微生物によりもたらされた化石燃料の恵みを、人類はほとんど無意識のうちに享受し、数100年間で使いつくそうとしている。そして、それが地球温暖化という問題を派生することが意識されつつあるが、私たちの将来の気候についての理解は漠然としたままであり、具体的に予測までの道のりは遠い。

地球環境変動の将来予想は、超長期的天気予報だ。天気予報の信頼性は気象衛星や気象観測点の増加により、近年向上してきた。同じことが超長期的天気予報にもあてはまる。より信頼性の高い気候変動予測を行うには、長期的な過去の気候データの質／量両面での向上が求められる。これが古気候解析の目的である。



過去の気候記録を追い求めて、私たちは海や山、あるいは砂漠や洞窟へと出かけ、時には地面に穴を掘る。大切なのは自然現象を観察する能力。野外調査をつうじて、私たちは研究試料を採集するとともに、大地と生命の営みを実感する。



私たちが実施するプロジェクトでは、モンスーンアジア地域などでの統合国際深海掘削（IODP）やカトマンズ湖掘削などで得られた堆積物、あるいは鍾乳洞で発達する石筍から、高い解像度で地球環境変動の記録を読み取る。

私たちは地球科学に課せられた命題を意識し、地球と生命の共生を願い、国際感覚豊かな若手科学者・教育者を育成することを心掛けている。

研究グループ構成メンバー：狩野彰宏・北 逸郎・大野正夫・桑原義博
ホームページ：<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/kano/>

物理・化学の目で地球環境を調べる

教室で学んだ物理学や化学を野外調査に応用して地球環境を調べることができます。気候変動など地球の表面のことはもちろん、地下や地球の周りの宇宙空間も研究の対象です。

地球自然環境講座では、地震波や電磁波を観測したり、地下から湧き出てくる水やガスの化学分析を行って、地震の発生や火山の噴火の仕組みを研究しています。また、気候変動の復元を目指して、地層中に保存された有機化合物やその安定同位体組成、あるいは、岩石の磁性の分析を行っています。さらに岩石・鉱物の分析によって地殻深部・マントルの構成物質を明らかにする研究を進めています。



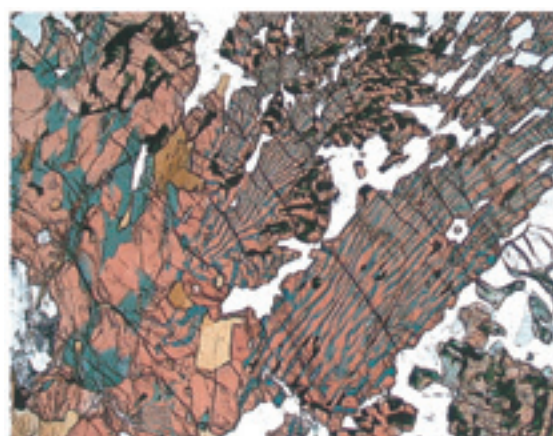
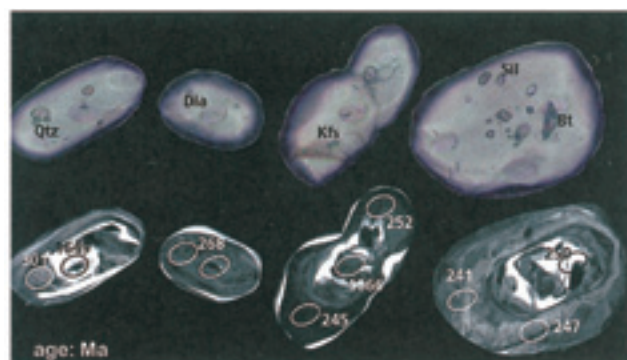
「生命はどんな環境で芽生え進化したのか」といったテーマから、「なぜ地球に磁場があるのか」というようなテーマまで幅広く取り組んでいます。

私たちは、このような研究のため野山を駆け、船で海を巡っています。あなたも参加しませんか？

研究グループ：

大野正夫、北逸郎、小山内康人、野木義史、中野伸彦

URL:<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/>



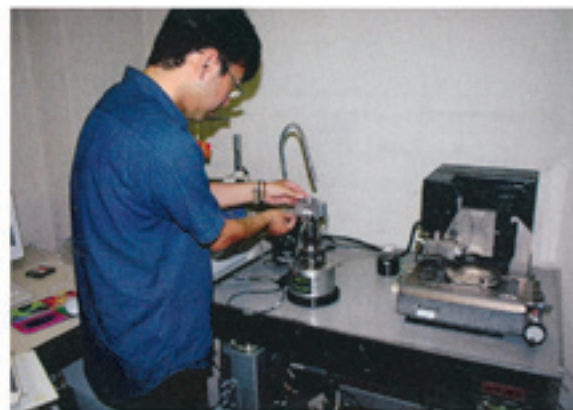
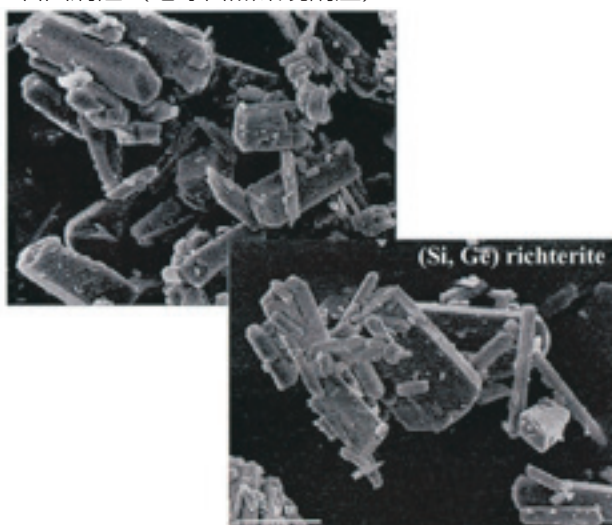
物質科学研究グループ

私たちの研究グループでは、地球を構成する基本単位“鉱物”を対象に、X線回折装置、透過型・走査型電子顕微鏡、原子間力顕微鏡、赤外分光などの分析機器を駆使し、また、リートベルト解析、X線プロファイル・フィッティング解析、顕微鏡画像解析などの最新の鉱物学専用プログラムソフトを用いて、日夜、ミクロな世界を探っています。皆さんもミクロな世界の謎の解明に挑戦してみませんか？

主要造岩鉱物および環境指標鉱物の鉱物化学的研究

主要造岩鉱物の角閃石族鉱物と、環境指標鉱物として重要な層状珪酸塩鉱物の結晶化学的研究を行っています。それらの天然での生成条件や変成・変質過程を究明し、地球環境にやさしい産業廃棄物処理法の確立を目指しております。すなわち、様々な化学組成の鉱物を実験室で合成し、共同利用の各種分析機器、すなわち超高压電子顕微鏡室の各種透過型電子顕微鏡（EDS、EELSを含む）、中央分析センターの赤外分光分析装置をはじめ熱分析および各種元素分析装置を用いて鉱物化学的検討をおこなっています。

石田清隆（地球自然環境講座）

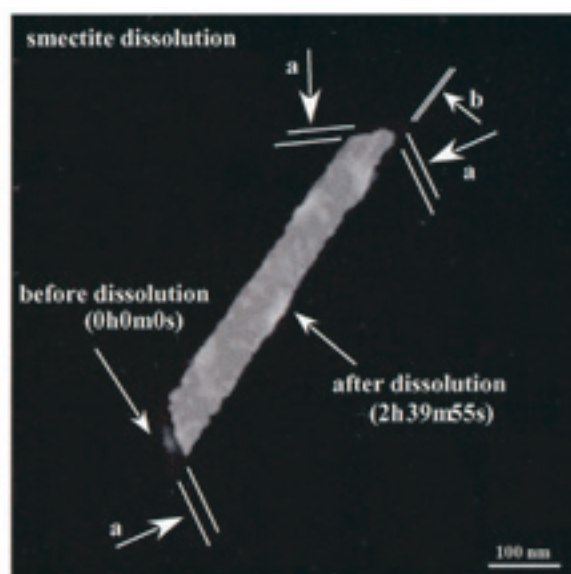


鉱物は地球環境の過去・現在・未来を語る！

鉱物には、地球の過去の気候や環境を復元し、未来の環境を予測するための指標になるものがあります。例えば、イライトと呼ばれる雲母粘土鉱物の結晶化度を精確に求めることにより、そのイライトがもたらされた当時の気候が乾燥であったか湿潤であったかを推定することができます。また、放射性廃棄物地層処理場の緩衝材として期待されているスメクタイトの溶解速度・機構を解明することにより、処理場周辺の環境変化を予測し、長期的な安定性・安全性を評価することができます。皆さんも私たちといっしょに、鉱物を研究することで、過去の地球環境を復元し、未来の地球環境を予測してみませんか？

桑原義博（地球自然環境講座）

E-mail: ykuwa@scs.kyushu-u.ac.jp



生物多様性分野

現在地球上では、私たち人類の影響による環境破壊や地球温暖化などに伴う地球規模での生物の生息環境の悪化が速度を増し、それによる生物の大量絶滅、それにとまなう生物多様性の減少が大きな問題となっています。このため、我々の将来にとって生物多様性や生態系の保全に関する研究の重要性が増してきています。今後も、生物多様性を維持し利用していくためには、様々なレベルにおける生物多様性を理解していく必要があります、分類学や生態学、遺伝学などの各分野を組み合わせたアプローチが重要となっています。しかし、このような研究が行われている教育・研究機関は少数です。

私たちは主に昆虫類の系統分類学を研究する4名の教員を中心に、各種昆虫類の分類学、形態学、系統学、生物地理学、生態学、行動学、保全生物学、進化生物学などを研究する院生たちと一緒に「生物多様性分野」という研究グループを作っています。私たちは、多様な研究対象や研究課題について、海外も含めたフィールド調査を積極的に行うのはもちろんのこと、比較形態や環境モニタリング、飼育実験から、DNA解析まで幅広い手法を用いて、生物

多様性の解明を目指して日々研究を進めています。また、生物多様性に重大な影響を与える外来種の管理とリスクマネジメントといった現在問題となっているトピックについても研究を行っています。

地球規模の自然保全のために、海外での保護地区調査や日本各地の野生生物の調査活動に多くの研究成果を挙げております。

大自然のなかで生物の自然史を探りたい人や、昆虫が好きでその系統分類や生物地理、行動や生態などを研究したい人、生態系の保全や外来種問題に取り組みたい人など、生物多様性に興味があり、自ら学び研究していこうという意欲にあふれた皆さんは大歓迎です。皆さんも、私たちと一緒に研究生活を送りませんか？

地球自然環境講座：阿部芳久 教授

荒谷邦雄 教授

細谷忠嗣 助教

地域資料情報講座：舘 卓司 講師

ホームページ

<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~blku/home.htm>



私たちの研究グループで進行中の主な研究課題

タマバチ上科の系統分類と生態
外来昆虫の生態とリスク評価・防除
コガネムシ上科の系統進化と生態
 Gondwana起源の陸塊に隔離分布する食材性昆虫類の系統生物地理
 ヤドリバエ科の系統分類
 琉球列島におけるコガネムシ上科の系統生物地理
 稀少野生生物の評価・選定およびモニタリング
 ノミバエ科の系統分類
 シジミチョウ科(ミドリシジミ族など)の分子系統

タテハチョウ科(とくにフタオチョウ族、マダラチョウ亜科)の系統分類と生物地理
 ショウジョウバエ科の系統分類
 クワガタムシ科の系統分類
 チョウの斑紋における地理的変異の解析
 タマバチとその寄生蜂の進化生態学
 シジミチョウ幼虫の食性ならびにチョウ目の卵寄生蜂の生態
 オオセンチコガネの地理的色彩変異の研究
 鯨類の遺伝的多様性の調査
 カブトガニの系統地理学

連携講座『生物インベントリー』

生物多様性論や保全生物学の発展に伴って、近年にわかに重要視されてきた概念に「生物インベントリー」があります。inventory という英語はもともと「発見する」「見つける」という意味のラテン語から派生した言葉で、「在庫調べ」「棚卸し」「資産情報」といった商用語や情報工学の用語として用いられることが多いのですが、生命科学においては「ある一定の地域に生息する生物の総体を種数および個体数を反映させた目録として表すことおよびそれを作成する調査事業」を意味します。一般社会における認知度はまだ足りませんが、実学としての社会的な要請は確実に高まっていると言えます。

もちろん1人の人間がすべてを把握することは不可能ですので、それぞれの生物群ごとに研究が進められます。地球上にはほとんど解明されていない無数の生物群集が潜んでいます。それをできるだけ実数に近づけるのが私たちの究極の目標です。

このたび新設の本講座では、国立科学博物館との連携で、実際にこの課題に携わっている3人の客員

教員が以下のような話題を提供します。

- 1) 古くて新しい動物系統分類学について、リンネが創始した命名の思想以来の歴史的展開を概観し、クモ類を例にどこで誰が何を研究しているかを眺め今日的課題を探ります。(小野 展嗣 客員教授)
- 2) 陸上における生物多様性がもっとも顕著で未知の生物の宝庫である土壌動物群集について、その概観、調査法、調査の実例などを、とくに昆虫に重点を置いて日本と熱帯アジアの例を対比しながら解説します。(野村 周平 客員准教授)
- 3) 近年飛躍的に進んでいる DNA 塩基配列の比較研究を基軸に系統地理学を論じます。これは種の形成の歴史や地理的分布がどのように形成されたかを研究する分野で、とくに鳥類の最新の研究例を紹介します。(西海 功 客員准教授)

実際には、生物多様性分野と並走しながら、教員陣のそれぞれの専門分野の経験を生かして「発見」の場を作り、皆さんと一緒に個々の課題に取り組むことになるでしょう。



生物インベントリー講座：小野 展嗣 客員教授
野村 周平 客員准教授
西海 功 客員准教授



現在取り組んでいる主な研究課題：

クモ類の系統分類学的研究
アジア各国のクモ類のインベントリー
伊豆・小笠原諸島のクモ類の生物地理
土壌性甲虫類の多様性と群集構造
アジア産ハネカクシ上科甲虫の系統分類学的研究
甲虫標本における自然史学的情報システムの構築とデータベース化
島嶼における陸鳥類の系統地理学的研究
鳥類における遺伝子試料と剥製標本との一括管理システム
東アジアにおける鳥類の DNA バーコーディング

教員紹介

日本社会文化専攻

●社会構造 P 33

吉岡 斉 吉田昌彦 杉山あかし 直野章子
マシュー・オーガスティン

●文化構造 P 34

清水靖久 松本常彦 西野常夫 波瀾 剛
施 光恒 アンドリュー・ホール

●地域構造 P 35

高野信治 三隅一百 山下 潤 阿部康久

●経済構造 P 35

関源太郎 北澤 満 堀井伸浩

●産業資料情報 P 36

三輪宗弘 宮地英敏

●基層構造 P 37

田中良之 中橋孝博 岩永省三 溝口孝司
佐藤廉也

●比較基層文明 P 38

宮本一夫 辻田淳一郎

●地域資料情報 P 39

小山内康人 服部英雄 中野 等 舘 卓司

●極域地圏環境 P 40

本吉洋一 野木 義史 外田智千

●日本語教育 P 40

松村瑞子 山村ひろみ 松永典子 志水俊広
西山 猛 小森和子

●(講座に属せず)

アンドレア・ゲルマー

国際社会文化専攻

●アジア社会 P 42

太田好信 東 英寿 益尾知佐子
長谷千代子

●欧米社会 P 43

古谷嘉章 松井康浩 嶋田洋一郎

●比較文化 P 43

根井 豊 新島龍美 鍋木政彦

●比較政治 P 44

大河原伸夫 岡崎晴輝

●異文化コミュニケーション P 44

井上奈良彦 小谷 耕二 高橋 勤
李 相穆

●国際言語文化 P 45

太田一昭 阿尾安泰 松原孝俊 秋吉 収
福元圭太

●地球自然環境 P 47

阿部芳久 北 逸郎 狩野彰宏 荒谷邦雄
石田清隆 大野正夫 桑原義博 中野伸彦
細谷忠嗣

●地球環境保全 P 48

黒澤 靖

●生物インベントリー P 49

小野展嗣 野村周平 西海 功

社会構造講座

教授 吉岡 斉

専攻分野は現代史です。とくに科学・技術に関連する話題を得意としております。核エネルギーをはじめ「ハード」な分野が得意なのですが、最近は医学・医療など「ソフト」な分野にも研究関心を深めています。現代史の研究は政策決定の基礎であるとの信念から、原子力政策論争などにも、深く関わっています。

教授 吉田 昌彦

日本の前近代から近代への移行メカニズム解明をメインテーマとし、近世国家の如何なる枠組みが維新変革を規定したかという問題を、特に朝幕藩システムの変動や討幕主体析出を中心として検討している。また、古代から近世にいたる前近代国家論や近代天皇制と「臣民」の心性との関連についても関心を持っている。

准教授 杉山あかし

大きな枠組で言えば社会学、その中で特に、マス・コミュニケーション論、情報化と社会変動、社会理論、文化的再生産論、カルチュラル・スタディーズといったところを主要研究領域としています。批判的、葛藤理論的な立場から、「軽く」見える様々な現実の背後に確固として存在する社会的必然性（法則性あるいは理論）に迫りたいと考えております。

准教授 直野 章子

社会学、カルチュラル・スタディーズ。記念碑、博物館、証言集などのマテリアルカルチャーを手がかりに、社会的な記憶が生成される過程を、“Nation”の（再）生産との関係で分析。特にヒロシマの被爆の記憶について研究しており、被爆者から聴きとり調査を行っている。また、「記憶」「補償」「償い」などをキーワードに、植民地支配や戦争の暴力に曝された人たちが、いかにして回復へと向かうことが可能なのか、もしくは不可能なのかを考えている。暴力と表象の関係、トラウマ研究にも関心がある。



YOSHIOKA Hitoshi



YOSHIDA Masahiko



SUGIYAMA Akashi



NAONO Akiko

文化構造講座

教授
清水 靖久

日本近代の社会思想史、政治思想史を研究している。これまで 20 世紀初頭の社会批判、政治批判の思想に関心を注いできた。とくに木下尚江について、そのキリスト教、民主主義、社会主義、非戦論の思想とその後の軌跡を解明してきた。これからは広く 20 世紀を通して研究したいと考えている。

教授
松本 常彦

専攻は日本近代文学、とくに芥川龍之介を中心とした小説研究。小説が文学に限らず種々の言説領域を摂取し、自らを編み出す言説編成の様相を具体的な作品に即して考える作業が続けている。たとえば芥川の歴史小説は古典の焼き直しと称されることも多いが、その古典の焼き直しが、なぜ現代小説足り得たのであろうか。そうした問題に応じるために、その小説を同時代言説のネットワークの中に置いて眺めてみるといった作業をしている。

准教授
西野 常夫

比較文学。日本近代文学を、西洋文学からの影響に注目しながら、読んでいる。とくに、実存主義や象徴主義の要素を感じさせる作品に興味がある。日本近代詩の形成、異文化間におけるモチーフやテーマの表現方法のちがひ、翻訳、翻案といった問題にも関心がある。

准教授
波瀾 剛

日本近現代文学・比較文学専攻。安部公房をはじめ、日本あるいは東アジアにおけるアヴァンギャルドの受容と変容について研究してきました。現在は 1930 年代、とくにモダニズムとエキゾティズムのかかわりに興味を持っています。

准教授
施 光恒

政治理論・政治哲学。特に現代リベラリズム論、人権論。今後数年間は主に、東アジアなど非欧米社会にも受容しやすい人権論の構築、リベラルな国家におけるナショナリティやエスニシティの適切な位置づけ等の課題に取り組みたい。

准教授
Andrew Hall

日本近代歴史、植民地・占領地政策、特に満州国の教育史を専攻している。満州国（または朝鮮）の非日本人に対する教育制度、学校行政、教科書、教員養成、言語政策等を研究している。



SHIMIZU Yasuhisa



MATSUMOTO Tsunehiko



NISHINO Tsuneo



NAMIGATA Tsuyoshi



SE Teruhisa



Andrew Hall

地域構造講座

教授 高野 信治

主従制・官僚制・領主制をキーワードに近世日本の民衆支配のメカニズムの解明をめざし、民俗学等の視角も摂取しつつ成果の一端を『近世大名家臣団と領主制』（古川弘文館、1997）や『藩国と藩輔の構図』（名著出版、2002）としてまとめた。さらに今後は、領域（支配）と地域（生活）の社会空間的相関性を自己（個我・共同体・民族・国家）という他者という切り口から考えてみたい。

教授 三隅 一百 (ペンネーム：三隅一人)

数理モデルによる社会学理論の構築のほか、量的・質的データ分析法に関心があります。公共財問題、地域紛争、社会階層と移動、役割論などいろいろつまみ食いしていますが、ミクロとマクロをつなぐ双方向的な社会的メカニズムを解き明かすことが目標です。

准教授 山下 潤

都市部における持続可能な発展の進捗状況を測る持続可能性指標の開発も視野に入れ、国内外の地域開発論・都市政策論を厚生・環境に留意して地域構造の視点から持続可能な都市を軸として研究を進めている。さらに総合演習と地域調査論を通じて厚生、環境、社会、経済に留意した地域づくりに関するセミナーを開催してゆく。

准教授 阿部 康久

主に中国を対象にして経済地理学的研究を行っています。具体的には、国有企業改革に伴う企業立地と就業構造の変化や人口移動等を研究しています。また、最近では大学院生の関心にあわせて、中国における外資系企業の立地や留学生の人口移動とキャリア形成に関する研究も行っています。



TAKANO Nobuharu



MISUMI Kazuo



YAMASHITA Jun



ABE Yasuhisa

経済構造講座

教授 関 源太郎

専攻は経済思想、政策思想、経済学史。現在の主たる研究テーマは、18～19世紀スコットランドの貧民救済問題に対する経済学的接近の理論、思想、政策の歴史的意義の解明、および、現代イギリスにおけるポスト・サッチャリズムの政策思想の歴史的意味の検討であるが、戦前イギリスの経済思想の研究にも関心を広げつつある。

准教授
北澤

満

近現代日本経済・経営史を専攻している。具体的には、戦前期の石炭産業史及び財閥史に関わる研究を行ってきた。石炭産業史については、北海道地方における個別企業経営、石炭カルテルの実態等を分析している。石炭産業の中心に位置したのが財閥系の企業であり、その産業構造の特質を把握するために財閥史の研究も進めてきた。主に石炭販売・金融について、財閥という組織内における企業間関係の分析を行っている。総じて「個別の事例分析の積み上げによって全体像の構築を目指す」スタイルをとっている。

准教授
堀井

伸浩

中国のエネルギー産業分析、中国の体制移行と産業構造研究、中国の環境（大気汚染）問題の研究。中国の産業が市場経済への移行によってどのような影響を受け、変容してきたのかについて、特にエネルギー産業（石炭、電力）をケースに実証分析を進めている。また中国の大気汚染問題の実態と政策課題について、環境経済学が提示する政策手段の適用性の評価など、政策提言を念頭に置いた実践的研究を志向している。

産業資料情報講座

教授
三輪

宗弘

専攻は経営史と軍事史である。一次資料に準拠した歴史的なアプローチで、「エネルギー問題」を経済と軍事の両面から切り開いていきたい。あわせて「戦争」、「秩序」とは何かという問に正面から向かい合いたい。

准教授
宮地

英敏

専攻は近現代日本を対象とした経済史・経営史・社会史。特に中小・小零細企業（今のところは主に陶磁器業）に注目しつつ、その歴史的な位置づけであるとか、それらを対象とした経済政策、貿易商社の果たした役割、技術導入の過程などを研究してきた。炭鉱関係の史資料が豊富な記録資料館（箱崎理系キャンパス）に研究室があるので、石炭産業へもフィールドを広げていこうと考えている。



SEKI Gentaro



KITAZAWA Mitsuru



HORII Nobuhiro



MIWA Munehiro



MIYACHI Hidetoshi

基層構造講座

教授
田中 良之

専攻は日本考古学・先史人類学もしくは骨考古学。物質文化の諸属性の分析からその象徴性と階層性をとらえ、それらの時間的・空間的動態の検討から先史社会システムの研究を行っている。また、墓における考古学的情報と被葬者である出土人骨の遺伝的情報をあわせて検討することにより、原始古代の親族構造の分析も行っている。

教授
中橋 孝博

古人骨には古代の人間のみならず、彼らの生活や社会、自然環境に関する多くの情報が秘められている。生物としてのヒトを主な研究対象とする自然人類学の立場から、そうした古人骨をもとに日本人のルーツ問題や時代変化、性差、抜歯風習、寿命、人口変化などをテーマに研究している。

教授
岩永 省三

研究主題は、弥生時代の金属器とくに青銅器を中心素材として弥生文化の特性とその成因を解明すること。青銅器の機能変化と他の文化要素の時間的変化との連動関係の検討による社会・政治組織の変容の解明。弥生時代以降の国家形成過程の解明。古代国家形成に決定的影響を及ぼした7世紀後半から8世紀の対外関係を、都市構造の変化や仏教美術様式の時間的変化などから解明することなど。

准教授
溝口 孝司

専攻は理論考古学・社会考古学。事例研究のカヴァーするテーマは葬送行為、物質文化と社会構造、カヴァーする地域・時代は日本弥生時代、ヨーロッパ新石器・青銅器時代。本年度は1) 葬送行為の変遷から見た北部九州弥生社会の構造変動の研究、2) 北部九州弥生時代甕棺の分類学的研究に集約的に取り組む予定。学生諸君とともに考古学理論と実践のリンクを目指したい。

准教授
佐藤 廉也

専門は文化地理学・生態人類学。アフリカの森林域で長期にわたるフィールドワークをおこない、焼畑農耕、狩猟活動、森林産物の採集・利用、自然に関する民俗知識、集落動態、社会変化などの調査を続けるとともに、民族誌資料や空中写真、旧・新版地形図、リモートセンシングデータなどを活用することによって、人間社会と自然環境の動態的関係を明らかにすることをめざしてきた。近年は、遊動社会の定住化、動植物相の動態と文化・社会構造の関係、写真資料などを用いた過去の植生の復原手法、などのテーマにとくに関心を持っている。

比較基層文明講座

教授 宮本 一夫

中国における農耕民と遊牧民の成立過程ならびにその後の文化接触について、新石器時代から殷周時代にかけて考古学的な研究を行っている。また、東アジア諸地域における狩猟採集社会から農耕社会の成立、その後の農耕社会の発展に関して、総合的な法則性と諸地域間の変異について比較研究を行っている。著書に『中国古代北疆史の考古学的研究』（中国書店、2000）がある。

准教授 辻田淳一郎

専攻は日本考古学。古墳時代の日本列島における地域間関係、社会組織の変化過程に関する考古学的な研究を行っている。現在は特に東アジア世界の中の日本列島という視点から、古墳時代開始期における列島規模での威信財システムの成立・展開過程について分析を進めている。



TANAKA Yoshiyuki



NAKAHASHI Takahiro



IWANAGA Shozo



MIZOGUCHI Koji



SATO Ren'ya



MIYAMOTO Kazuo



TSUJITA Junichiro

地域資料情報講座

教授 小山内康人

南極、インド、マダガスカル、アフリカ等のゴンドワナ超大陸断片や日本・東アジア各地の高温～超高温変成岩類を研究対象とし、フィールドワークと室内実験から、40億年以上に及ぶ地球創生期からの花崗岩マグマの生成機構や大陸地殻進化テクトニクスの研究を行っている。

教授 服部 英雄

「あるき、み、ふれる歴史学」を实践中。全国の遺跡を見る機会に恵まれた。そのかたわら中世の荘園歩きも行ってきた。その成果は『景観にさぐる中世』（1995、新人物往来社）として刊行した。ひきつづき『地名の歴史学』（2000、角川叢書）、『峠の歴史学』（2007、朝日新聞社）を刊行した。次は「差別の歴史学」を出す予定で、3部作にしたいと考えている。歩くなかで考えてきた、しいたげられた人々の群像・歴史も明らかにしたい。

教授 中野 等

研究上の主たる関心は日本の中近世移行期、つまり戦国時代から江戸時代の前半くらいまでの政治・社会の動きを身分制の再編などを視野に入れつつ、統一的に把握することにあります。また、歴史叙述の基本となる史料についても構造的、多角的に議論を展開していきたいと「念願」しておりますが……。

講師 館 卓司

双翅（ハエ）目の分類学・系統学の研究を、形態学および遺伝情報に基づいておこなっている。特に、ヤドリバエ科の寄生戦略に進化の解明に取り組んでいる。近年、双翅類昆虫の高次系統や後胸部の形態進化に興味を持って研究している。



OSANAI Yasuhito



HATTORI Hideo



NAKANO Hitoshi



TACHI Takuji

極域地圏環境講座

客員教授

本吉 洋一

東南極大陸昭和基地周辺のリュツォ・ホルム岩体、東方のレイナー岩体およびナピア岩体に分布する高度変成岩類の岩石学的研究が主要な研究テーマである。とくに、鉱物間の反応組織の解析から、岩石の経てきた物理条件の変化を定量的に復元し、それに鉱物の年代測定結果を加味して、地殻の変動履歴を明らかにすることを目指している。

客員准教授

野木 義史

極域、特に南極海および南極大陸を研究対象として、地形、地磁気異常や重力異常等の地球物理学的観測をもとに、超大陸の分裂および形成テクトニクスやそのメカニズムの解明等の研究を行っている。また、観測船等による現場での観測を通して研究を行うことにより、実際の固体圏環境に関する総合的な理解を深める。

客員准教授

外田 智千

南極およびその周辺地域を対象として、フィールド調査と顕微鏡による岩石記載、X線分析装置や質量分析を用いた岩石・鉱物試料の化学分析や年代測定等の解析手法によって、深部地殻での高温～超高温変成作用のプロセス、副成分鉱物の挙動と年代論のリンク、ゴンドワナ超大陸の形成機構、太古代の地殻形成発達史の研究をおこなっている。



MOTOYOSHI Yoichi



NOGI Yoshifumi



HOKADA Tomokazu

日本語教育講座

教授

松村 瑞子

社会言語学、対照言語学、特に意味・語用論を中心に研究を行っています。具体的には様々の言語事象に対して意味・語用論的な説明を与える研究、更に日本語と他言語の丁寧戦略の相違や男女差を社会言語学的な観点から分析しています。言語教育に役立つ言語学を目指しています。

教授

山村ひろみ

専門はスペイン語学。これまでスペイン語における時制体系のあり様を研究してきた。その結果、スペイン語の時制選択にあっては、各事態の理解において話し手が「変化」を認識するか否かが一つのポイントになる、ということが分かってきている。現在は、このようなスペイン語の時制体系のあり様を、スペイン語と系統を同じくする言語、また日本語のようにスペイン語とは系統も類型も異なる言語の時制体系と比較対照しながら言語と時間の関係を、人間がその環境をいかに認知しているのか、というより広い視点から考察している。

教授
松永 典子

専門は教育史・日本語教育学・多文化関係論。日本の近代化過程における異文化受容と異文化接触上の問題を教育理念・教育の方法論との関係から考察している。これまでは日本と東南アジア（特にマレーシア）及び東アジアとの関係論の考察が主であったが、日本の文化人・教育者による西欧文化の受容・加工と発信の過程の解明についても関心がある。めざしているのは、多文化化・多様化の進む社会の「共生」のための研究教育である。

准教授
志水 俊広

専門は第二言語習得論および英語教育学。特に、日本語母語話者による英語の統語構造の習得を普遍文法の枠組みで解明することや東アジアにおける英語教育に関心があります。これまで主に英語を対象として研究が進んできた第二言語習得論や言語教育学が日本語教育に対してどの程度有効であるのか、また日本語を対象とすることで新たな展開があり得るのかということを追究したいと思っています。

准教授
西山 猛

専攻分野は日本語と中国語の対照研究。特に指示詞や人称代名詞の体系の研究。たとえば日本語の指示詞の体系は三系統で、これは韓国語と同じである。それに対して中国語や英語では二系統となっている。どうしてこのような違いがあるのか、またどうして同じ系統であっても実際の用例からみると様々な違いがあるのか、ということ調べている。また日本語や中国語の指示詞の系統が、歴史的に見てどのように変化してきたか、ということにも興味を持っている。

講師
小森 和子

専門は第二言語としての日本語における語彙研究。主たる研究テーマは、日本語学習者のバイリンガル心内辞書構造と第二言語としての日本語の単語認知処理過程である。また、第二言語の語彙習得と語彙知識の評価測定、内容理解における語彙知識の役割、コーパスに基づく日中同形語の共起分析等の研究も行っている。



MATSUMURA Yoshiko



YAMAMURA Hiromi



MATSUNAGA Noriko



SHIMIZU Toshihiro



NISHIYAMA Takeshi



KOMORI Kazuko

(講座に所属せず)

准教授
Andrea
Germer

My research focuses on the nexus of gender, nation and state in modern Japan; on Japanese women's history and feminist historiography in comparative perspective with Western developments and with particular emphasis on the lay historian Takamure Itsue; on discourses of the pre-war and post-war women's movements and feminist theory. My most current project is a comparative study of visual propaganda in Japan and Germany during World War II, in which I examine the visual representations of ideologies of gender, 'race' and 'culture' in both countries.

アジア社会講座

教授 太田 好信

専攻は文化人類学。私は、現代社会における文化の様態とそれを研究する文化人類学が直面している諸問題について考察している。そのような考察は、まず近代・西欧というある特定の「時間・場所」に編成された知として文化人類学を歴史化する視点によって開始する。しかし、歴史化することの目的は、現在から過去を裁くことではなく、新たな文化人類学の姿を語るためのスペースを構築することであるから、同時に文化人類学と隣接科学と境界を曖昧にしてゆく作業も行っている。

教授 東 英寿

専攻は、唐・宋時代を中心とする中国文学。特に唐宋八大家の一人、歐陽脩（1007～1072）について、文学・哲学・歴史・目録学等の様々な視点から考察しています。さらに、先秦時代から近代に至るまでの中国の文学批評史の訳注にも取り組んでいます。また、江戸時代に刊行された日本の儒学史『漢学紀源』の考察を中心とした日本漢学の研究や中国の少数民族（土家族）の文学・文化の考察も行っています。

准教授 益尾知佐子

東アジアの国際政治（国際関係論）および中国研究（地域研究）。中華人民共和国と世界との関係に関心がある。現代中国の対外政策を中心に、東アジアの国際関係や、中国国内における内外政策の関連性などについて研究している。これまでは特に、毛沢東時代から改革開放期にかけての中国の対外政策の変化が当時の国内政治の転換といかに関連してきたかに興味があり、中国共産党や鄧小平など指導者個人に関する試料を幅広く集めてきた。今後は1980年代から現在にかけての日中関係の変容や、冷戦後の東アジアの安全保障環境の変化などの問題についても検討を深めていきたい。

講師 長谷千代子

中国雲南省徳宏地域での民族と宗教に関する調査を通して、中国における近代化の意味を、市井の人々の暮らしの視点から、主に文化人類学的手法で研究している。伝統芸能の近代的意味付けに関する日中比較研究にも関心がある。



OTA Yoshinobu



HIGASHI Hidetoshi



MASUO Chisako



NAGATANI Chiyoko

欧米社会講座

教授
古谷 嘉章

文化人類学専攻。博士（学術）（東京大学）。ラテンアメリカ（特にブラジル）でのフィールドワークを通して、「文化」理論の批判的検討、「近代」（modernity）についての理論の再構築、ブラジル、アマゾン、インディオについての言説の研究を行っている。

教授
松井 康浩

政治社会史・国際関係論専攻。前者については、アーカイヴ資料を幅広く渉猟・検討することで、スターリン体制下の個人の内面世界や親密圏・公共圏を解明する実証研究に従事している。後者については、近年の国際関係理論の展開を踏まえつつ、地域秩序の諸相にアプローチする理論枠組の構築を目指している。

教授
嶋田洋一郎

専門はドイツ文学およびドイツ社会文化思想史。主要な研究領域はドイツ啓蒙主義。現在特に関心を寄せているのは 18 世紀の思想家ヘルダーの名著『人類歴史哲学考』における歴史記述の問題や人類史における文化ならびに知の交流形態といった問題である。また当時の情報伝達の重要な手段であった翻訳の問題にも興味がある。



FURUYA Yoshiaki



MATSUI Yasuhiro



SHIMADA Youichiro

比較文化講座

教授
根井 豊

デカルト哲学とそれが孕んでいる諸問題——知識、思惟と存在、心身問題 etc——の研究を中心にして、デカルトからカントに至る近代哲学の展開を考察している。それは単なる過去の思想史研究ではなく、現代から近代を見ることと、近代から現代を見つめることを重ねることによって、現代の思想状況の立体図を描く試みでもある。

准教授
新島 龍美

プラトン、アリストテレスを中心とする古代ギリシア哲学に関する研究を行うと共に、そこでなされた思考が、こころの哲学や実践哲学等の様々な領域における現代の「哲学的諸問題」の考察にとっても極めて大きな魅力と可能性を持つものであることから、現代哲学にも関心を有している。

准教授
鍋木 政彦

専攻は政治思想史、ドイツ思想史。19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけての転換期ヨーロッパにおける思想を、主としてその政治思想的意味という観点から究明することを課題とし、これまではティリッヒ、ディルタイ、ニーチェを研究対象としてきた。最近では、これらの思想家から学んだ諸々の主題（歴史論、道徳論、権力論、解釈学、人間科学の方法論等）について、現在の議論を視野に入れつつ、歴史的のみならず理論的にも考察していきたいと考えている。



NEI Yutaka



NIIJIMA Tatsumi



KABURAGI Masahiko

比較政治講座

教授 大河原伸夫

通念的な「政治」を成り立たせている概念や（概念枠組み）の構造の批判的な検討を課題としています。特に「権力」や「影響力」といった概念に焦点をあてています。

教授 岡崎 晴輝

2004年に九州大学に着任しました。法学研究院に所属し、大学院レベルでは、比較社会文化学府と法学府で教育活動に従事しています。研究者としては、市民自治という観点から政治理論を再編する仕事に取り組んでいます。私のホームページ（<http://wwwl.ocn.ne.jp/~aktiv/>）がありますので、ご笑覧ください。



OKAWARA Nobuo



OKAZAKI Seiki

異文化コミュニケーション講座

教授 井上奈良彦

コミュニケーション・言語・文化の関心に広く関心がある。最近の研究領域は、ディベートなどにおける議論の構造の分析、ディベートやスピーチの指導法、外国語教育のニーズ分析など。大学院の授業では他に、談話（会話）分析、コミュニケーションの民族誌、異文化コミュニケーション、社会言語学と語学教育、CMC などを取り上げてきた。<http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~inouen/> 参照。

教授 小谷 耕二

専門はアメリカ文学。とくにウィリアム・フォークナーを中心とした南部文芸復興期の文学、文化と思想に興味がある。現在の研究課題は、①南部アグレーリアンの「伝記」作品に関する研究、②黒人の自伝の系譜の研究、③現代アメリカ社会の多文化主義の系譜の研究、等である。いずれも、アメリカ社会内部での異文化間の交流や軋轢に関わる諸問題を考える糸口になるのではないかと考えている。

准教授
高橋 勤

専門領域は 19 世紀アメリカ文学。特に、ヘンリー・ソー、ラルフ・エマソンらの研究に携わってきたが、現在はソー研究を起点にして、マサチューセッツ州コンコード周辺の文化史に関心を寄せている。19 世紀中葉のコンコードでは超絶主義者らの知的交流が行なわれたばかりか、奴隷制反対運動、教育改革、女権運動、禁酒運動等、さまざまな社会改革の発信地でもあった。そうした社会思想あるいは精神風土を踏まえたうえでソーやエマソンのレトリックが形成され、さらに新たなディスコースを生み出された経緯について研究を進めている。

准教授
李 相穆

外国語教育における教育方法論、言語情報処理論、さらに教育工学に関する研究を行っている。具体的にはマルチメディア外国語学習教材が学習過程に及ぼす学習効果を測定し、学習者のインタラクションを分析することで、外国語学習のモデルが備えなければならない要素の解明に取り組んでいる。また、日本語教育や韓国語教育の分野では、e-learning 教材を開発し、教育現場での実用化を図っている。



INOUE Narahiko



KOTANI koji



TAKAHASHI Tsutomu



Lee Sangmok

国際言語文化講座

教授
太田 一昭

研究課題は、16 – 17 世紀イングランド演劇史である。現在以下の点について調査研究を行っている。(1) 職業劇団の地方巡業活動。(2) 演劇の検閲・統制。研究資料として特に注目しているのは、初期イングランド演劇関係記録(劇団の地方都市訪問記録、上演許可・上演料支払記録、公演禁止記録等)と演劇・出版統制関係布令である。併せて、この時代の演劇の中核を成すロンドンの演劇(シェイクスピアのほか)についても再調査をしている。

教授
阿尾 安泰

18 世紀フランス文学・思想、特に、ジャン＝ジャック・ルソーを主な研究対象とする。彼の作品の中でも、自伝的著作とされるものの分析に関心をもっている。またそこに現れる「個」と「全体」との関係を考える中で、フランス現代思想、とりわけフーコーの権力論に興味を抱くようになってきている。

教授
松原 孝俊

この数年、「現代韓国文化論」にも関心を広げ、「ナショナリズムと韓流文化」をテーマに、UCLA や北京大学・ソウル大学校などの研究者と共同研究を展開しています。国際言語文化講座では、院生諸君と共に、朝鮮半島を中心とした東アジア文化論を担当し、日本語を母語とする学習者のための韓国語教育、日本統治期朝鮮半島の民衆生活誌研究、あるいは古代から江戸時代に至る日韓文化交流史研究、さらには海外所在和本・朝鮮本古典籍データベース作成などの指導に従事しています。

准教授
秋吉

收

研究分野は、魯迅を中心とした中国近現代文学、日中比較文学、台湾文学などで、また中国近現代作家の文章の翻訳紹介などにも取り組んでいる。中国文学と日本や欧米の文学が“共振”することで獲得し、変化させていったその「近代」の問題を、原資料を子細に繙く作業を通じて新たな視点で捉え直すことを目標とする。最近の研究対象として、魯迅の散文詩集『野草』、徐玉諾、頼和、芥川龍之介、タゴール、『中国文学（月報）』、北京『晨報副刊』など。

准教授
福元

圭太

専門は現代ドイツ文学・思想、特にトーマス・マンを対象として文学と性と政治の三幅対（三つ巴）問題を研究してきました。現在是一元論的思想や心身問題に興味があり、生物学者のヘッケルや精神物理学者のフェヒナーらを対象に、ドイツ語圏モデルネの自然科学に伏流する神秘主義的思想の系譜を辿りつつあります。また独和辞典の編纂に長年かかわっており、語学的な仕事もしております。



OOTA Kazuaki



AO Yasuyoshi



MATSUBARA Takatoshi



AKIYOSHI Shu



FUKUMOTO Keita

地球自然環境講座

教授
阿部 芳久

昆虫（主な研究対象は膜翅目タマバチ科）の生物地理や種分化、生物間相互作用（共生や寄生など）の研究、ならびにその基礎となる生物多様性を認識する研究（系統解析・分類）をおこなっている。外来昆虫（主な研究対象は双翅目ハモグリバエ科）の生態とその生物防除に関しても研究中である。

教授
北 逸郎

地球深部流体の化学組成と同位体組成に基づいて、地震・噴火現象およびマグマの起源や活動場に関する地球変動の研究とこれらに密接に関係する地熱や天然ガス資源の研究を行っている。また、プレートの沈み込み現象や地殻変動に伴って深部流体の起源物質となる深海底堆積物の中に記録された窒素や炭素の同位体比の変動による古環境変動の復元と大気汚染物質から現在の地球環境の研究にも取り組んでいる。

教授
狩野 彰宏

生命と地球環境の関わりに興味を持ち、温泉環境での堆積物や微生物群集と、数億年前の地層や化石を比較することで、太古の地球環境と海洋生態系について研究を進めている。また、地球温暖化の予測計算結果の正当性を検証するために、鍾乳石に記録された過去数万年間の古気候記録の解読を試みている。詳しくは下記 HP を参照してください。
<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/earth/kano/>

教授
荒谷 邦雄

クワガタムシを題材に生物の進化の問題に取り組んでいる。この問題を追求するため、日本国内はもちろん世界各国に足をのばし、野外におけるクワガタムシの生態や行動を調査する一方、飼育による幼虫の栄養生理や生活史の解明、実験室内での形態比較、核型や DNA 分析に至るまで幅広いアプローチを試みている。最終的にはクワガタムシそのものを歴史性をもった存在として総合的にとらえることを目的としている。

准教授
石田 清隆

地球表層の岩石圏、すなわち地殻の構成物質の挙動に関する基礎的研究を行っている。地球表層の物質は、造山作用、変成作用、火山作用、風化浸食作用さらには生物作用による様々な変遷を記録して現在に至る。これらの記録を、鉱物化学や結晶学的手法で解析していく。

准教授
大野 正夫

岩石や堆積物の残留磁化を分析して過去の地球磁場の変動を求め、磁場の成因など、地球のダイナミクスの研究を行っている。グローバルな環境変動にも興味を持っている。また、地震・火山活動について、電磁場を観測して地下の構造を求めたり地殻活動をモニターする地球電磁気学的手法や、地下の水やガスなどの化学成分や同位体組成などを分析する地球化学的手法で研究している。

准教授
桑原 義博

地球表層部における岩石・鉱物と水との反応に関心を持ち、結晶の成長・溶解過程における鉱物の挙動を、結晶表面と内部の両方から原子レベルで追跡している。物質表面の凹凸情報を獲得できる原子間力顕微鏡を用いて、鉱物の表面構造緩和等の解明にも取り組んでいる。

助教
中野 伸彦

ユーラシア大陸の東半分をしめるアジア大陸の形成過程・形成時の地球深部の物理現象を、東南アジア地域に分布する変成岩を対象として、地質学的・岩石学的に解析している。

助教
細谷 忠嗣

コガネムシ上科甲虫の多様性について、主に分子系統学的・集団遺伝学的手法を用いつつ、海外を含めた野外調査や飼育実験、形態比較など広い視点に立って、生物地理学、進化生物学、系統・分類学、および保全生物学的研究を行っている。また、輸入ペット昆虫による外来種問題やDNAバーコーディングプロジェクトへの参加も行っている。

地球環境保全講座

教授
黒澤 靖

専攻は地水環境保全学。アジアモンスーン地域を対象にしている。本地域では水田耕作に化学肥料が大量に投与されるが、化学肥料中の窒素成分は水中で人体に有害な形態の窒素に変化するため、水田やその周辺域では、地表水・地下水の水質汚染が起こる。また、山地部では人口圧のために斜面が農地として開発されるが、本地域斜面では土壌侵食がよく発生する。このような水質汚染や土壌侵食の発生について、諸要因の影響を明らかにする研究を行っている。



ABE Yoshihisa



KITA Itsuro



KANO Akihiro



KUROSAWA Kiyoshi



ISHIDA Kiyotaka



OHNO Masao



ARAYA kunio



KUWAHARA Yoshihiro



NAKANO Nobuhiko



HOSOYA Tadatsugu

生物インベントリー講座

客員教授

小野 展嗣

国立科学博物館動物研究部で、蛛形類（クモ、サソリ、ダニなど）、多足類（ムカデ、ヤスデなど）および無翅昆虫類（トビムシ、カマアシムシ、シミなど）を担当。その自然史科学的研究、標本の収集管理および教育事業や展示の立案や実施などに従事し、とくにクモ目（Araneae）については自然史科学的研究を進めてきた。近年はクモ類化石の古生物学的研究や、生物多様性認識の背景にある分類の思想やラテン語にも取り組む。日本蜘蛛学会では評議員、編集委員、自然保護専門委員を務めている。

客員准教授

野村 周平

日本を含むアジア産アリヅカムシ類（昆虫綱コウチュウ目ハネカクシ科）の分類学的研究を主に行っている。アリヅカムシは森林などの土壌中に生息する微小甲虫であり、これらを含む土壌生態系における生物多様性の研究も行っている。

客員准教授

西海 功

鳥類の繁殖生態や種分化に関する研究をおこなっている。近年特に、南西諸島の生物地理学的研究や東アジアの鳥類の DNA バーコーディングに取り組んでいる。鳥類集団の歴史を遺伝子から探り、形態学および生態学的比較検討を加えることで、日本の鳥類の集団分化と種分化を解明し、その結果を種分類学に適切に反映させることを目指している。



ONO Hirotsugu



NOMURA Shuhei



NISHIUMI Isao

比較社会文化学府学生数一覧

平成 22 年 5 月 1 日現在

(修士課程)

(博士後期課程)

(全学生数)

	1 年	2 年	計
日本社会文化専攻	35	40	75
国際社会文化専攻	20	20	40
計	55	60	115

	1 年	2 年	3 年	計
日本社会文化専攻	22	20	54	96
国際社会文化専攻	10	11	19	40
計	32	31	73	136

(女子学生数)

	1 年	2 年	計
日本社会文化専攻	28	31	59
国際社会文化専攻	15	8	23
計	43	39	82

	1 年	2 年	3 年	計
日本社会文化専攻	15	15	31	61
国際社会文化専攻	4	5	10	19
計	19	20	41	80

(留学生数)

	1 年	2 年	計
日本社会文化専攻	27	23	50
国際社会文化専攻	8	6	14
計	35	29	64

	1 年	2 年	3 年	計
日本社会文化専攻	10	12	18	40
国際社会文化専攻	3	4	4	11
計	13	16	22	51

(社会人学生数)

	1 年	2 年	計
日本社会文化専攻	1	2	3
国際社会文化専攻	2	3	5
計	3	5	8

	1 年	2 年	3 年	計
日本社会文化専攻	2	0	7	9
国際社会文化専攻	3	3	3	9
計	5	3	10	18

比較社会文化学府とその講座・教員の各ページは、下記のホームページに掲載されています。

<http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/index.php>

主な進学先・就職先

修士課程修了者	進学	九州大学大学院、鹿児島大学大学院、広島大学大学院、東京海洋大学大学院	
	就職	大学・研究教育機関・公務員	民間企業
		地域科学研究所、メディア開発総研、自然環境研究センター、奈良文化財研究所、中国科学院新疆生態地理研究所、海南大学（中国）、山東省魯東大学（中国）、大連外国語学院（中国）、西南学院中学校・高等学校、博多女子高等学校、松浦東高等学校、精華女子高等学校、西日本国際教育学院、佐賀県教育庁、北九州市役所、香川県国分寺町役場、駐福岡大韓民国総領事館、外務省大洋州アジア局、福岡労働衛生研究所、唐津市役所、等	共同通信社、西日本新聞社、熊本日日新聞社、第一法規、凸版印刷、JTB 九州、財界九州、西日本総合リース、NTT ドコモ九州、リクルート、ヒューマンリソシア、三井物産、ニプロ、富士通、ランドコンピュータ、ユニテック、日本 IBM ソリューションサービス、伊藤忠テクノソリューションズ、東洋ビジネスエンジニアリング、富士ゼロックス、三井化学、住友電気工業、日本海洋掘削、京進、日東紡、マリンフード、ケムコジャパン、森ビル、レオパレス 21、等
博士後期課程修了者	進学	大 学	
	就職	九州大学、福岡大学、福岡女子大学、中村学園大学、福岡工業大学、福岡国際大学、久留米大学、北九州市立大学、九州栄養福祉大学、九州国際大学、長崎大学、長崎国際大学、大分大学、大分県立芸術文化短期大学、立命館アジア太平洋大学、熊本県立大学、九州東海大学、熊本学園大学、鹿児島純心女子大学、山口大学、下関市立大学、京都大学、大阪大学、静岡大学、和光大学、北陸先端科学技術大学院大学、梅光学院大学、北見工業大学、大連大学（中国）、上海師範大学（中国）、遼寧師範大学（中国）、新疆師範大学（中国）、長榮大学（台湾）、慶州大学校（韓国）、トリブベン大学（ネパール）、ナンヤン工科大学（シンガポール）、メキシコ国立自治大学、マレーシア大学、ラフマン農業大学（バングラディシュ）、ほかに大学非常勤や専門学校非常勤多数。	その他の研究文化機関・民間企業 柳川古文書館、長崎県立対馬歴史民俗資料館、長崎市遠藤周作文学館、小城市立歴史資料館、竹田市立歴史資料館、福岡アジア都市研究所、大阪府文化財センター、自然環境研究センター、大韓民国国務総理、熊本県御船町役場、中国新聞社、教育出版、NTT データシステムズ、協和エンジニアリング、中村薬局、飯塚病院、三谷商事(株)、イオン九州、台湾立法院、(財)日本生態系協会、(株)地域科学研究所、未来計画株式会社、株式会社平凡社、MTC 株式会社、株式会社分析センター、等

発 行 者 九州大学大学院
比較社会文化学府

発 行 年 月 2010 年 7 月

詳細については下記にご照会下さい。

〒 819-0395 福岡市西区元岡 744

九州大学大学院比較社会文化学府

TEL 092 (802) 5786 (大学院係)

FAX 092 (802) 5785 (//)

ホームページ : <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/index.php>

